

目 次

学部長あいさつ	1
特集15周年	
学部の名称に因んで	2~3
総科1回生を迎え、そして送った頃	4
総合科学部卒業生より	5~9
新任紹介	10~11
シリーズ 研究室紹介	12~14
シリーズ 街の総科	15
沼田研修	16~17
学部の記録	
教養講座	18~21
卒業予定者進路状況及び就職内定企業名	22
特別研究論文題目紹介	23~28
人事異動	29
退官の言葉	30~33
飛翔箱	34~37

卒業生の諸君へ

総合科学部長

天野 實



卒業生諸君、卒業おめでと。

長い人生の中で最も活気に満ちた青春の4年間の学生生活を終え、社会人として巣立って行く諸君に心から御祝いの言葉を述べたい。

諸君は、総合科学部という、日本の大学の中でもユニークな学部へ入学した時は、何が他の大学・学部と異なっているのか、殆ど分からずに入學して来たことだろうと思う。4年間の学生生活を振りかえって、他の大学・学部へ進学した高等学校時代の同級生と話してみても、卒業を目前にひかえて、広島大学の総合科学部に来て良かったなあとの実感を持っているだろうか、従来の学部の専門指向型でなく、核となる専門分野を持ちながら裾野の広い学際的な教育を受けたと感じているだろうか。

日本の将来が必要とする人間は必ず広い視野を持ち、すばらしいバイタリティを持つ人間である。益々多様化する日本の社会に、いや国際社会に出て活躍するためには広い視野に立って自己を確立した人間が必要である。

今の日本の我々の生活を考えると、あまりにも忙しい毎日である。このような時代に最も必要なものは何であろうか。それはじっくりと腰を落着けて自己をみつめ、思索にふける時間をもつことである。キエルケゴールの言葉に「退屈することは高貴なことで、退屈を知らない人間は野卑で下らない人間だ」というのがある。何もしないでじっとしていれば何か考えるしかない。それも思索というか思念をころすというか何事かに思考力を集中しなければ耐えきれない。何かくだらないことをしていれば深い思索とは縁遠くなってしまふであろう。時々

レビを消して自分と対峙してじっくりと考える時を持ってほしい。物事を判断する時にきつと広い視野に立って正しい方向づけが出来るであろう。

ここまでの私の文章を読んだ諸君はデカルトの「Cogito, ergo sum われ考う(思う)ゆえにわれあり」を思い出す人もいると思う。この言葉は彼の著書「方法序説」に出てくるものである。くわしくは「理性をよく導き、もろもろの学問において真理を求めるときの方法についての序説」である。彼の生きた時代(1596~1650)までは哲学書は全てラテン語で書かれていたが、初めてフランス語で書かれた。最初の文章は「良識(ボンサンス)は、この世で最も公平に分配されているものだ」誰も良識を持ってはいるが、その正しい使用方法をとらないことが問題であると指摘している。現代の日本人こそ自ら思索し、良識にみがきをかけねばならないであろう。

自分で物を考えると、必ず疑問に思ふ所が出てくるであろう。その時に役立つものが読書だと思ふ。活字離れのひどい時代に生きている諸君だが、もっと本を読んで欲しいものだ。ただし、ただ知識を増やす読みかたでなく、理解し、思索の糧になる読書をしてほしい。

諸君が大学を卒業し、社会人としての今後の生活に大切なことはやはり努力することであろう。いかなる環境に置かれようとも大きな夢をもち一歩一歩目標に向っての絶えざる努力をしてほしいと思ふ。

学規：あいづやいち

- 一、ふかくこの生を愛すべし
- 一、かえりみて己を知るべし
- 一、学芸を以て性を養ふべし
- 一、日々新に面目あるべし

卒業生諸君の今後の健闘を心から期待する。

学部の名称に因んで

広島経済大学学部長
式部 久

「総合科学部」という名称は、今ではすっかり定着して、他大学にもこれに倣うものが出て来ているが、設立の当時は、当事者の間でもちょっと落ち着かない感じがあったものである。

構想の段階でむしろ有力だったのは教養学部という名称だった。先例があるという安心感もあった(大学設置の準拠法である「大学設置基準」には、学部の名称が例示されているが、それらはすべて文学部・理学部・工学部等の古典的なものであった。「その他これに準ずるもの」と書かれてはいるものの、新しい学部名は容易に認められないという情勢だった)。

だが、それでは東大教養学部の後塵を拝することになるというので、たしか当時の飯島学長の支持もあって、総合科学部で押そうということになったのだった。

そして結果的にはそれがよかったのであろう。

総合科学部のいう「総合」とはいかなるものかということ、大学設置審議会の実地調査においても問題になったし、学内の他学部との協議一学部によってこれが実にしんどい仕事になった一においても論議の一つの焦点になった。

総合科学部と称するためには「総合科学」という学問が成立していなければならぬと言われたり、また総合科学部内にも、「総合科学」なる学問を作るのだと宣言する人もいたりして、議論は錯綜した。結局は、現在の大学の研究・教育が余りに専門分化の方向に傾き過ぎていることの是正策として、研究・教育のそれぞれのレベルで総合化を自覚的に目標として行くということで落ち着いたが、それに対してもまた総合化はそれぞれの分野や学部で行われていることだと反論する者があった。

英訳を The Faculty of Integrated Arts and Sciences としたのは、我ながら適訳だったと、その後のいろいろの経験に照らして、気に入っている。

Faculty とあるところは、当初 College としたのだった。他の学部は Faculty としているが、総合科学部の場合は、全学の一般教育を引き受けていることであり、その点の特殊性を考慮して違いを示そうとしたのだった。だが、そのうちに、格が下だと見

られるのではないかといった懸念が部内にちらほらし、他学部に合わせて Faculty と称することに変更した。(どうも日本では格付けに敏感なようである。アメリカでもイギリスでも、school といった言葉も大学の学部名に用いているが、日本では見られない。私は今でも、College でよかったと思っている。)

「総合科学」を直訳しないで Integrated Arts and Sciences としたところが味噌であるが、これは総合科学部の学問分野が、アメリカのリベラルアーツ・カレッジに重なり合うものである点をとらえて、これを Arts and Sciences として示し、「総合」を Integrated という一語で示したのである。アメリカにもこういう名称の学部があるとは聞いていない。その意味ではオリジナルなものである。

unified science という言葉もあるが、これだとある一つの主張になってしまって、我々の志向するものとは大きな隔りがあった。

また他大学のある英文の教授は、Integrated だと過去形(?)になって、すでに統合された学問を教授する意味に取られてまずいと批評していたが、言葉の意味はそんな風に限定的に取られるものだろうかと疑問に思った。

その後私は何回となく外国の教育専門家と会談する機会があったが、“Integrated Arts and Sciences”でもっておよその内容が推察されると答えられるのが常だった。そして、関心はむしろ名称ではなく、その中身に向けられて来た。1982年の広大大教センターとOECDの共催のセミナーでは、総合科学部の改革構想について報告したが、その報告文(英文)は多くの参会者に求められたし、翌年来学したアメリカの Boyer, Levine 両氏(当時カーネギー・ファウンデーション)は、それが縁で氏の大学(Bradford College)その他を視察するよう招いて下さった。

Integration ということは、今アメリカの大学でしきりに語られ、努力されている事なのである。1985年の視察旅行で私はそのことを実感したが、Boyerの近著 College でも Integration という言葉が大書されている。

1987年には、アメリカの19大学の学長を文部省が日本の大学視察に招き、私も説明役を当てられたが、

その際も最も多く質問が集まったのは総合科学部のことであった。これまた Integrated に一語のなせる業かもしれない。

だが、ここまで書いて来て心配なのはやはり学部の実態である。名は体を表わすという。「総合」にして「Integrated」にして、選ばれたこれらの言葉は、それぞれの局面で、努力すべき方向や課題を示して来たのであり、それなりの成果はあったと思うが一そしてこの課題は容易に実現し難い「永遠の課題」ともいうべきものであろうが一、それにしても実態はどうなのだろうと、離れているだけに心にかかる。

とりわけ願いたいのは、一般教育と専門教育の一体化という点である。

一方では、その事が今日本の大学教育での一つの大きな共通の課題になっているという背景がある。また他方では、そのことを標榜して学部が誕生したという経緯もある。それだけにまた全国の大学からの期待も大きい。

大学院も完備したことであり、良いモデルが作られることを心から願いたい。

総科1回生を迎え、そして送った頃

文学部教授・地理学

藤原健藏

総合科学部創設当時の就職委員会の活動について書いて欲しいとの編集者の依頼を受けたものの、手元に当時の記録を残していないので、薄れた記憶をたぐりながら少し回顧してみたい。

大学紛争の余じんがなお残っていた昭和49年5月、私は教養部学活委員長として新人生受け入れの諸行事を、心配された妨害行為もなく無事終わることができて、ホッとしていた。しかしそれも束の間、6月に発足する総合科学部の入試、そして学生受け入れ等の準備にとりかかった。学部長の今堀先生、学務委員長の今は亡き岡本先生達と毎日細々と打ち合わせをしていたものである。幸いたくさんの受験生が集まり、その中から第1回生を定員数にいくばくかの水増しをして迎え入れることができた。しかし、問題は歩留まりである。全員が3月の受験失敗組であり、心ならずも総科にひとまず立ち寄ったという感じの者も多い。果たして来年の3月まで何人残ってくれるだろうか。心配である。

案の定、6階の大会議室で行った入学式で、学生生活についての私の説明が終わった直後、今でもあの状況が忘れられないが、後の方からツカツカと近付いてきた女子学生が私に質問した。「休学するにはどうすればいいんですか？」一瞬げんに思い、ついで驚き、落胆した。俺たちがこんなに苦勞してつくった学部なのにと。それ以来、私は会議の度ごとに「歩留まり論」つまり学生をいかにして定着させるか、総科に魅力を感じさせるかを持ち出した。そのために必要なのは内容の濃い講義であり、楽しい雰囲気の研究室である。8月始めまでの突貫授業（始業が遅れたため）の後、学活委員会が企画した西条研修センターでの合宿を終える頃には、青白く自信げな学生達の顔にも生気がよみがえっていた。そして私自身、来年の3月は心配ないと確信した。

学活委員長の激務から解放された翌年の6月、遅れている研究の挽回をと思っていた矢先、にわかに入設された就職委員会の委員長に学部長指名をされた。東北の田舎町育ちの私には、「広島には地縁、人縁一切なし、まして関西の経済界は全く知らない。こんな者にできるはずはない。適任者が他にたくさんいらっしゃる」といって逃げたが、結局今堀学

長に屈伏させられた形で引き受けてしまった。幸い、山田、大内、坂口、今中の諸先生方をはじめ、委員の先生達がいろいろなアイデアを考えてくれたので、就職指導を積極的に進めることができた。それらの中から、思いつくままいくつかをあげてみよう。

①学部紹介のパンフの作成：総合科学部？卒業生売り込みには、この奇っ怪な学部の内容を要領よく紹介したパンフが不可欠である。初めカラー刷りの印刷費を要求したが、学部予算委員会の理解が得られず、半分にバツサリ。頭にきたが、気をとりなおして一部モノクロとし、自前でカットをつくり、レイアウトをしてなんとか仕上げた。でも、なかなかの好評で企業訪問に役立った。

②広高同窓会からの応援：広島・関西・東京の同窓会に出席して学部の内容を説明し、企業から求人してもらおうよう依頼した。佐藤会長をはじめ多くの方々から有力企業を紹介していただいた。各教官も手分けして求人票の獲得に奔走。私の場合には南極観測関係の人脈をかなり活用した。しかし、教官の中には学生の就職に全く無関心、委員会の活動にむしろ否定的な方もおられた。

③公務員試験のための講習会：1回生の2、3年次に上級職パスの職員を招いて説明会を開いた。なかなか合格者ではなかったが、学生に大きな刺激となって、社会文化では自前で勉強会をもつようになった。広島県の県や市の会議に出席すると、最近よく総科の卒業生に挨拶される。あの講習会も無駄ではなかったなと思っている。

回顧すると際限がない。いざ、最初の卒業生を社会に送り出すこととなったら、折あしくひどい就職難。そのため、私は7月以降ほとんど毎日、山崎学生係長や牧野事務官の席を占領して、会社に電話をかけまくったものである。それに応じて学生諸君もよくがんばってくれ、11月にはほとんどが就職決定の朗報をもってきてくれた。私自身も重責を果たし、安心して今の研究室に移ることとなった。

1 回生 (49年度生)

社会文化コース

等 雄一郎

僕がつとめる国立国会図書館は、ご存じのかたも多いと思うけれど、日本国内で発行されるすべての出版物を所蔵する唯一の国立中央図書館である。日本における知的活動のいわば“総合記憶装置”である。この記憶装置に情報を入力し、整理し、保管し、そしてそれを人々が上手に利用できるようにお手伝いするというのが、僕たち職員の仕事である。

そういう僕の仕事にとって、総合科学部で学んだ経験は強い味方になっているように思う。そう感じる理由は箇条書にまとめると次のようになる。

まず第一に、科学技術の発達、情報化社会の進展、国際社会とのつきあいの拡大・深化などによって、人間の知的活動の範囲は広がるいっぽうである。せまい専門科目のワクに縛られることなく、文科系から理科系まで広範な知識を身につける機会にめぐまれた。

つぎに、そうした情報化や国際化などといった個々の現象は、それぞれがばらばらなのではなく、相互に緊密に関連しあっている。現象の個別の側面のみではなく、それを総合的にとらえるという知的訓練をうけた。

さらに、情報量の爆発的増大によって、今日、情報の選択・選別という作業がますます重要となっている。こうした作業をおこなううえで必要な批判的精神、あるいはもっと広くいえばベラリズムの気風といったものをおしえられた。

もちろん学部を卒業して十年以上にもなる現在、大学時代に身につけた知識がそのままの形で役立つことはめったにない。けれども、うえに書いたような調査・研究の方法論のようなものを自家菜籠中のものとできたことが、総合科学部に在籍したことの財産であったようである。そして、ここで身につけた財産は調査・研究という特殊な分野にかぎらず、ものの方見方一般に通じる方法論であるように思う。

2 回生 (50年度生)

社会文化コース

久留島 幹 夫

Q：学部在学中に、最も関心を持っておられた事は、何ですか。

A：それは、アジア研究で何をするか、ということでした。何をやっていいのかわからない状態だったので、「何をするか」を考えることが最大の関心事でした。

Q：学部在学中に、最も関心を持って取り組んでおられたことは何ですか。

A：映画、演劇などのサークルに入っており、学部外での活動に主に取り組んでいました。また日中友好協会での仕事も、広島と呉で半々に行っていました。

Q：日中友好協会ではどのような仕事をしていらっしゃいましたか。

A：様々な文化活動—主に中国語の講習などを行っていました。

Q：学部在学中に印象に残ったことは何ですか。

A：様々な先生との出会いなどです。また私達の頃は先輩が余りいなかったもので、皆で一緒に色々なことをしたり考えたりしました。何分（総合科学部の）はじめの方の学生でしたので、何をしたら良いかわからず、色々やった記憶があります。

Q：最後に、過去の学生と現在の学生との違いについて思うところをお聞かせ下さい。

A：かつての学生と比べると、学部・コース・専攻などへの帰属意識が薄れてきているように思えます。

Q：どうもありがとうございました。

(インタビュー：編集部 戸敷 聡)

3 回生 (51年度生)

情報行動科学コース

瀬川 あずさ

私が総合科学部にいった頃は、まだ卒業生というものがないくて、つまり、この学部を出たら大体どんなところに就職するのか、そのサンプルがなかったわけで、だからみんな、卒業してこういう職に就いてどうのこうのという意識が稀薄だったような気がします。(アンタだけだった) けどどいざ卒業って時になったら、みんなちゃんと就職していったけど。(やっぱりアンタだけだったの)

だから、というわけではないけれど、まあいささかはその気分を引摺って、私は卒業してからいわゆる就職というものをしませんでした。(これを世間では学生気分の抜けない、という) 本を読み芝居を観て、遊び人をしているうちに、いつのまにか本屋で本を売るようになり、そのうち何故かローカル・テレビの深夜番組をやることになり、そこで引っ張ってくれる人がいて、今はほとんど収入を、テレビ番組の構成台本を書くことで得ています。でも、それが職業という気はあまりしません。気の合う仲間芝居もやって、そこの台本も書くけれど、これも職業とはいえません。他に、ラジオのホンもやるし情報誌のコラムも書くけど、どれも職業ではない気がする。お金も、とても儲かったり赤字だったり、いろいろです。まあいいか。

大学で勉強したことが今何かの役立ってる、あっぱろのバカ、役に立っているかという、直接は何も関係ありませんね。大学で芝居やってたことは、結構大きく関係あるけど。だけどあのころは、何かやるときに、将来役に立つかも、なんてことはミジンも理由にならなかったし、だいたい十年後にこんなことしてとは思わなかった。(実をいうと、十年後なんて皆目見当がつかなかった) 人との出会い次第で、人生なんてどう変わるかわからないものね。まあ、だいたい思ったようにはなりません。しかし、それにもかかわらず、世間は思ったより甘い、というのが実感です。(天罰下るよ、ほんまに)

4 回生 (52年度生)

社会文化コース

河野 主 税

(総科を選んだ理由)

52年、できてまだ4年目で、文理共通の上、カリキュラムを自由に組める点がものめずらしかったからですね。

(当時の総科の様子)

1年から4年まで初めてそろったので、学園祭等にも初参加し、古江辺りから竹を買ってきて神輿を作ったりした。端末がそろっていなかったの、プログラム実習はパンチカードを使って入力した。

(就職にあたって)

個人的には長男で、島根に帰るという前提があり、公務員等が限度だったので具体的な有利・不利はなかった。しかし当時の同期生は広い分野で活躍している。広い分野から学べるので、大学に入ってから志を立てるのにいいのではななろうか。

(具体的な仕事の内容)

農協の上部団体、共済連で、債券の取り引き、運用等、所謂財テクをやっています。

(仕事以外の点で、総科とは?)

学生生活一般になりますが、最初に実家からはなれて生活したのが貴重な体験でした。又、他学部と比べると、出身地が広がったので、西日本全体に友人関係が広がりました。

(これからの総科・総科生に対して)

学部としてはユニークな所だから、その特性を生かして、専門の他学部で学んだ人より違った人間になってもらいたい。最初の学部としてできた時の理念、広いクロスオーバーの視点をもった人間を育てる、という事を大切にしていってほしいですね、学生の皆さんは、人が集まった時に仕事の話だけでなく、いっしょに遊べて行動できる人、集団の性質に応じて遊びを発生させる事のできる人、“遊びの達人”になって欲しいですね。

12回生 (60年度生)

社会文化コース

藤本貴子

(総科を選んだ理由)

ひとつには、職業のために大学へ行こうとは思わなかったから。もうひとつには自分の専門分野を入学以前にあまり細かいところまで決めなくて済む、ということからです。

(当時の総科の様子)

私が入学した当時は57生が4年生でしたが、上級生などの学年も団結しているというか、仲間意識が非常に強かったように思います。ところが、例えば自己紹介本を作るようなメンバー、積極的に動く人たちの比率が私たち60生あたりから減ってきて、ソフトボール大会や学祭の盛り上がりにも欠けてきたのでは。定員数を増やしたり、コース改正など総科がひとつの転換期を迎えていた時期でした。

(就職にあたって)

学生時代に勉強したことは、それはそれとして、就職とは無関係。また、このところ総合科学部のな学部・学科が増えてきて、総科といっても殆んど珍しくなくなってきていると思います。

(具体的な仕事の内容)

テレビ番組のプログラム・ディレクター。キュー出し、カメラ割り、字幕出し、マイク音量、VTRのスタート等の指示を出す。中継で外に出た、記者やカメラに指示することもあります。(仕事が深夜に及ぶこともしばしば……。)

(仕事以外の点で、総科とは?)

もともと総科向きの性格だったので総科に入ったことで変化したことなのかどうかは分かりませんが、(自分が文系で)身近な所に理系の人がいたり、自分とは全く違うことをしている人がいたりしたので、彼らを「別世界の人間」として見るような先入観をなくすことができたのと、いろいろな友達ができ、人脈が広がったことはよかったと思っています。

(これからの総科生に対して、)

変に自己規制したりせずに、学生時代に思いっきり遊ぶことです。

5回生 (53年度生)

比較文化コース

秋山敦子

学生時代は体育系のクラブ活動に振り回されて、授業は専ら睡眠時間だった私に、“15周年特集”などという晴れがましい紙面は気恥ずかしい。しかし、原稿依頼を辞退しなかったのは、“総科”が私の中でまだ不定形に動き続けているからにはほかならない。

そもそも、なぜ総科を選んだか。それは18歳の時、自分の道を、例えば“英文学”という具合にすっぱりと決められなかったからだ。決めることは理不尽に思えた。だから、見つけた“総科”の存在は、立往生した私の唯一の救いだった。しかし私の“不決定の人生(!?)”は、以後延々と続く。

寛大な比較文化研究講座を「少女マンガ論」などという人を食った卒論ですり抜けた後、“暫定的”に地元企業のOLに。そして1年後、OLをしながら芸大受験を始める。美術は、広大を選ぶ時迷ったもうひとつの道だったからだ。3度のトライは不成功だったが、会社を辞め東京へ。東京も、もし広大に落ちれば来ていた場所だ。ある美術研究所で制作を続け、資金が尽きてからは生活の為に広告関係のアルバイトを始めた。広告関係。これまた、卒業した時就きたいと思って就けなかった職だ。そして今、契約社員で週4回、求人広告専門のコピーライターをし、他の時間は絵を描く、という毎日を送っている。やりたいことのために、やりがいのあることで収入を得ている、という点においては、卒業以来初めて満足している。しかし、たいていの人は、そんなこともうとくくりにやっているであろうから、ずいぶん遠回りしたものだなあ、とも思う。でも、この道を通る以外に私がここに来る道は無かっただろうし、今ここにいるからといって、万事が丸く収まってメデタシ、というわけではないのだ。

混沌を引きずって、やっとスタートラインについた気がする。社会に出て総科を意識したことを書いてほしい、とのことだったが、私の中の“総科”は常に意識している。あるいは“総科”を選んだ自分、といった方が適切かもしれない。この無器用な道が何かの形を成すことができたなら、その時こそ、私の原点“総合科学部”の名を、誇りを持って唱えたい。

8回生 (56年度生)

地域文化コース

川村信郎

とある天気の良い土曜日の午後。電話の音……。 (ねむそうな声で)「もしもし……」

「もしもし、川村さんのおたくでしょうか？こちらは広島大学総合科学部の『飛翔』委員の〇〇というものです。突然ですが、じつは、総合科学部は今年で設立15年をむかえまして、これを機会に卒業生の方に総合科学部について一言お聞かせいただきたいのです。それで現在総科を卒業したことが、どう役立っているとか、他学部出身の同僚と総科出身の自分とどういうところが違うのか、違わないのか」

(二日酔いで痛む頭をかかえながら)「はあ……。ぼくは今も大学院で歴史を勉強しているのですが、総科なら文学の人とか、哲学の人とか歴史以外の人と話ができて、物理の先生の研究室で遊んだりできた。それに終電の心配なしにずっと話したり、酒を飲んだりできましたねえ。そういうことはこっちではできないといえばできないのですかねえ……」

「なるほど。それではなぜ広大の大学院に進まず、東京の方へ進んだのですか？広大総科のここがイヤだったとか」

「そんな、ただ大学院が修士までで博士課程がなかったからです。まあ、それに東京にはいろんな意味で刺激や情報が多いですからねえ。でも逆に量が多いと、それを追うだけにおわって自分らしさを出しにくい危険はありますね。遊びすぎますし……。量は少なくともじっくり考えられるのがいいのか、どうでしょうか」

「そうなんですか……。どうも、ありがとうございました」(と電話は切れる)

(おおきなあくび)「寝なおそ……」

(編集部注) この電話は全く架空のものである。

8回生 (56年度生)

情報行動科学コース

沢田裕成

中学校教諭になって5年が過ぎようとしている。昨年転勤し、新たな学校で教鞭をとる毎日であるが、たまに同僚や生徒から出身校を聞かれる事がある。その時、広大の総合科学部だと答えると次の様な質問が返ってくる事が多い。

「理科を専門に研究する学部なのか。」

「一体どの様な事をする学部なのか。」

在学中より幾度となく聞かれてきた問いに対し多少の煩わしさを感じながらも、自分が数少ない個性的な学部卒であるという嬉しさをもって熱っぽく語ってしまう自分を発見するのである。これも愛校心というものであろうか。

確かに総合科学部での4年間は、種々な物を吸収した、自分にとって切っても切り離す事のできない時期であったように思うのである。

高校時代、自分の進むべき道や適性について漠然とした考えしか持っていなかった私にとって、大学の最初の一年間を通してじっくりと進路選択できる学部であるという事が非常に魅力的かつ新鮮であった。入学後も期待通りもう一度自分をみつめ直す機会を持つ事ができ、単なる知識の吸収のみならずその他の面でも得るものが多かった。また、この時期の友人達は私にとっての宝であり、卒業後各地で活躍している彼らといまもお連絡を取り合う事が私の楽しみの一つとなっている。

さて、この様に思い出深い大学生活を経て就職したわけであるが、総合科学部で得た物は今の教員生活に少なからず役立っている。私の場合、在学中に研究していたコンピューターのソフト作成が成績処理やCAIの方面で活かされている。また、表立った事ではないが文系理系を問わず他コースの友人達から得た影響が何らかの形で私の教育実践にプラスになっていると感じるのであり、これぞ正しく総合科学部ならではの事だと思うのである。

9回生 (57年度生)

地域文化コース

時 広 和 美

私の場合、18歳から独り暮らしを始めたせいか、親離れは比較的早くできたと思うのだが、卒業して今年の4月で4年もたつというのに、まだ、大学から離れられないでいる。

大学に近い所に住んでいるせいか、今だに大学に出没しているのである。

一番出没度の高いところは、生協靴部である。OL稼業をしていると、パンプスが必需品。かかとの打ち換え代もばかにはならない。デパートにある靴修理屋にもっていくと、1,000円前後もとられてしまうが、生協だと400円の安さ！その上、おじさんはやさしいし、なかなかのハンサムなのである。

それと、離れがたいのが、生協の自転車の空気入れと、図書館の自習室である。

また、人間ウォッチングの好きな私にとって、大学はまたとない格好の場である。将来有望な後輩たちを見るのは実に楽しいものである。頭のよさそうな人を見ると、この人は大学に残って将来は教授になるのではとか、美人の女子学生を見ると、この人は玉の輿組かなとか……ひとりにやにやしている私は人から見ると何とも不気味に映るかもしれない。

ともあれ、キャンパスを歩いていると学生時代に戻ったような気がして、妙に元気になれるものだ。あっという間の4年間であったが、今にして思えば、とても楽しく、私の人生の中でとても大切な時期であったと思う。後輩の皆さんも毎日を大切に過ごしてほしい。

とまあ、こんな私が大学から離れるのは、キャンパスの移転が先か、私が遠くへお嫁に行ってしまうのが早いか、と妙に心配してしまう今日このごろである。



生体行動コース

入澤 雅典

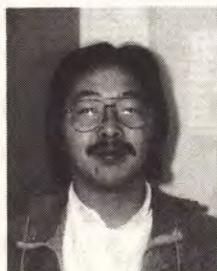
(いりざわ まさのり)

はじめまして。昨年10月に保健体育講座の助手として広大にやってまいりました入沢です。実は、私の出身はここ広島で、東千田キャンパスのすぐ近くの修道中学・高校に通っておりました。その後、東京学芸大学教育学部へと進学し、小学校の教師を旨として勉学とスポーツ（中学時代から競泳を始め、高校時代から本格的に水泳と取り組み、大学4年間続ける）に日夜励むなかで、スポーツの科学的な指導の必要性和、自分の勉強不足を痛感し、大学院に進むことになったわけです。

大学院では、水泳が身体に与える影響をいろいろな角度から研究し、特に、水球競技の運動強度の測定に力を注ぎました。大学院修了後、研究生と水泳部のコーチをしながら、東京周辺の大学で非常勤講師をしてブラブラしているところを運良くひろっていただいたという次第です。最近、大学で常勤の職を得ることは非常に難しくなっており、そういう意味では、たいへん喜んでおりますが逆に、大きなプレッシャーも感じています。

さて、広大の第一印象ですが、「さすが天下の広大だけあって伝統を感じさせる重厚なキャンパスだなあ。」というものでしたが、裏を返せば、古くてボロいということに気づいたのは、体育実技の授業を始めてからでした。これだけ多人数の学生がいる総合大学としては少し物足りない施設だとは思いますが、移転前なので新キャンパスに期待しています。

最近になってやっと総合科学部の複雑な建物の構造を把握し、一人でしかも頭をぶつけないで、どこへでも行けるようになりましたが、まだまだ未熟者の私ですので、皆様どうぞよろしくお願ひいたします。ちなみに、私は28才、独身です。この点に関して御質問、御要望などある方は、旧教育学部四階、エレベーターを降りてすぐの健康科学実験準備室へお気軽にお越し下さい。お待ちしております。



生体行動コース

萩田 典男

(おぎた のりお)

昨年10月1日付で着任しました萩田です。現在レーザー・ラマン散乱という手法を用いて超流動ヘリウム中の素励起の研究を行っています。簡単に言えば、 -270°C 以下のそれはもう寒い世界で元気に飛び回るヘリウム原子に高出力のレーザービームを当てて「あちちい！」とのたうつヘリウム原子を見て「うふふっ」と笑う多少サド的な実験を行っています。（思うに多くの物理屋と言うのは、すげべい心とサディスティックさを持ち合わせていると・先輩方すいません！）というわけで、教官、学生、一丸となって鼻息も荒く、目を鬼のようにして、自然界の根底に横たわる真理へと邁進しているすばらしい研究室に所属しています。

さて、新任紹介とのことですが、実は、私は4年前から博士課程後期の大学院生として広島大学に巣くっておりました。これを読まれる方々の中には、上に写った薄らとぼけた間抜け面の髭おやじをご存じでしょう。性格は、見ての通りの「気は優しくして力持ち、腹の出かかった強靱な肉体に健全な精神を宿らせ、未だ冷めや

らぬ燃えたる若人の情熱を内に秘め」と劇画のヒーローのようで、間抜け面。趣味は、摩擦係数の小さい斜面上における重力場中の物体の運動実験（スキー）、剛体の力学を漏れなく取り入れた運動実験（ポケットビリヤード）、解放端気柱内における定在波に関する波動力学実験（サクソフーン）と、どうしても物理的なものに偏りがちです。

多少ふざけた紹介文となりましたが、かけだしの研究者として、又、教育者として、努力して行きたいと思っておりますので、今後の萩田教官に乞うご期待！

では、皆さん悔いのない人生を送って行こうではありませんか。

おあとがよろしいようで・・・



自然環境コース

日下部 眞一

(くさかべ しんいち)

私が大学へ入学したのは、東大安田講堂攻防戦から一年後の1970年4月です。日本の1960年代の高度経済成長の歪みを突然に爆発させたかのように思える学園闘争の黄昏の時期でした。当時の社会や大学の諸問題がどれ程解決されて良かったのか、今ふり返ってみても、まだまだよくわからないことだらけなんです。現在、学生生活を送っておられる皆さんは、丁度そんな時代に生まれた人達なんでしょうね。現在の日本は、少なくとも経済力の点では世界に並ぶ国がない程に迄強くなっているように見えるし、私達の身の周りの物質文明、情報文明は、私達を本当にそのように信じ込ませるに足る十分な賑やかさを示しています。しかし、このような繁栄の裏には、きっと多くの矛盾がかくされていて、それは何らかの内発的・外発的要因があれば一瞬にして爆発するものであるかも知れません。昨年一年間の、中国国内の動き、東欧諸国の動きなどは、確実に地球全体で新しい歴史が書き込まれていることを示しているかのように思えます。また、生物が生棲する上での地球全体の環境条件が劣悪化していることが再確認されたのも昨年でした。このような新しい動きの中で、皆さんが総合科学部の中で学生生活を送る意義は、大変大きいように思えます。しかし、たとえ意義が大きくても、意義を意義たらしめるのは皆さんの行動であり、考えであり、選択であり、自発性にかかっています。大学を卒業して社会の色々な所に出ても自分で考え、自分の眼で世界を観ることができると人格を育てて下さい。私の研究室は、S214です。いつでも気軽に扉をたたいて下さい。

〔研究内容〕 遺伝学、進化集団遺伝学

進化生物学、集団生物学

研究室紹介

生体行動科学コース 藤原ゼミから

社会心理学とは何かを一言で表わせば、「人と人との相互作用の研究」といえよう。こうした学問を進めるには、机上の研究だけでは全く役に立たない。実際の社会であらゆることに取組み、そこでの体験を活かす必要がある。これを実践しているのが、藤原先生なのである。

先生は、人間行動研究講座では有名な映画好きである。先生の心理学や社会心理学の受講者で、映画の話を書き聞かなかったり、実際に映画を観なかったという人はいないであろう。昨年のは、少年時代から足繁く映画館に通ったその集大成が、『シネマ・サイコ映画心理学』（福村出版）という一冊の本になった。この本は単なる映画評論に止まらず、「キネマ旬報」の年間ベストテンを基に映画や映画評論家を多角的に分類したり、映画館の座席の大きさ等を実測し人間工学の観点から映画館を批評するなど、心理学的側面から映画にアプローチしている。これも映画に対する豊富な体験あってこそのものであろう。

一方、先生は『ラブー愛の心理学』の翻訳や『性と愛の真理』の執筆にも関わっておられる。これらの書物から、先生の「愛」への関心がうかがえるが、これまでの体験がどう活かされているのかまでは定かでない。先生の豊富な体験に興味のある方は、直接尋ねていただきたい。

さて研究室全体について目を移してみると、先生の活動性も反映して、活発で自由な雰囲気が漂っている。従って、藤原研は他の研究室の学生の出入りも多く、憩いの場となることもある。先生ともども、テニスやスキーに出かけたり、おいしい食事を求めてお昼ごはんのツアーに出かけたりとなかなか楽しい。ただし、この雰囲気に乗っただけいたのでは足もとをすくわれる。当り前ではあるが、自分をうまくコントロールし、大人として行動することが要求される。藤原研のモットーは「遊ぶ時は遊ぶ。やる時はやる。」なのである。

研究室紹介

「毎日が挑戦」の気持を持って

社会科学コース 舟場ゼミから

先生は、昨年秋ボストン大学国際関係学部の客員教授としてアメリカの学生に講義したり、大学院でリレー講義のメンバーに入ったりして研究の新しい分野を開拓して来られた。帰国後、早速『エコノミスト』誌に、「メイドインアメリカの挑戦—製造業の復活に賭けるMITレポート」という論文を発表し、ゼミナールで読む本も技術革新に関する英語の本の各章を割当てて報告させながらコメントするスタイルに変わった。アメリカの優秀な経済学者は、ソローのようなノーベル賞受賞者で功成名を遂げた人でも現実の課題から決して目を外らすことをしない。常に新しい問題ととり組み、理論化し政策提言することを忘れないという実感をもって帰られたのであり、それを講義やゼミで実践しようとされるのである。

舟場ゼミの特徴の第1は、そのテーマがきわめて幅広く、学生の興味に即して基本文献やサブゼミによる計量理論の基礎学習を積み上げながら、同時に学生が関心をもっているテーマに合致した文献の収集を指示したり、データ解析のための磁気テープを購入して端末で操作したり、フィールドワークを通じて聴取りや資料収集をするなど、多くのメニューが用意されていることである。また第2に3回生、4回生、大学院生の共同での勉強の機会が多く、研究室の3分の2近くは、こうしたスペースに用いられている。

中にはパソコン音痴や英語が苦手な学生もいるが、それはそれなりにテーマを見つけ、論文をつくり上げて卒業していく。先生のプレッシャーがきついのか、就職もほとんどが第1志望（昨年は民間、NHK、北九州市各1名、本年は広島県庁2、民間1）に進んでいる。このように書くと堅苦しいゼミに見えるかも知れないが、春には湯来温泉で合宿をし、研究室ではよくコーヒーを入れてダベっていることもある。

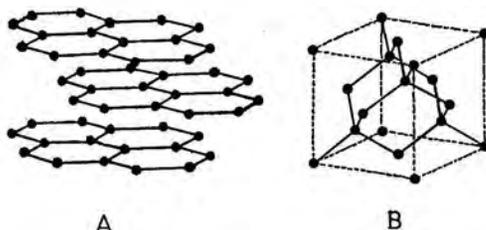
(XYZ)

物質科学の面白さ

“大学に入ったら何か面白いことしてみたい。”
 多分、だれしもそう思って大学に入学したことでしょう。ところで、いままでに広島大学で皆さんが受けた講義は、“面白さ”を感じさせてくれたでしょうか。“ウーン、・・・イマイチ”という答えが聞えてきそうな気がします。

むろん面白さは、知的なもの、感性的なものなど多面的で、感じ方も個性的で誰でも同じとはいかないでしょう。しかし、幼児期には誰しも素直にみんな同じようなことに興味を示してきました。その興味は大人になっても形を変えて生きつづけ、そのまま今の我々の行動を動機づけています。幼児期に私たちは空想によって、積木、粘土、ダンボールの空き箱等々の素材を使って、“欲しい”ものを作って面白がっていました。“積木”の素材として原子を選んだらどんな物が出来るでしょうか。一例として鉛筆の芯とダイヤモンドとを比べてみます。両方とも素材は炭素(C)ですが、両者は全く違った性質を示しています。同じ炭素を素材にしていながら、この違いはどこから生じるのでしょうか。現代の物質科学は、この理由を手取るように明確に教えてくれます。鉛筆の芯はグラファイトと呼ばれる構造の炭素が主成分で、平面的な蜂の巣構造の原子配列を取り、六角形の各角に炭素がきます(図A)。この平面状の構造が弱く結合し合って、立体的に積み重なって出来たのがグラファイトです。面と面との結合が弱いので互いに離れ易く、紙にこすりつけるとはがれて紙の面に残るのです。黒いのは、炭素がグラファイト構造をとると電気を通し易いからです。他方のダイヤモンド構造では炭素は立体的に結びつき合い、1つの炭素からみると回りの4つの炭素は、それを中心とした正4面体の角に位置するようになっています。(図B)。このため、ダイヤモンドは硬い性質を持ちます。ダイヤモンド構造をとると、炭素は電気を通さなくなり透明になります。多面体に磨き上げると美しく輝くのは、光の屈折率が大きいからです。このように、一種類の積木を使ってもその積み上げ方を変えれば全く違った性質がでてきます。

原子の周期律表をみると、原子は100以上もあり、



異なった原子を組み合わせて作る化合物や合金もあり、無数の様々な性質を持った物質をつくり上げることが出来るのです。物質は無機物質ばかりでなく、蛋白質の様な生体物質は種類の異なったアミノ酸から成り立っていますが、配列を少し変えただけで全く違った機能を示します。生命の持つある機能に着目すると、その機能発現を担う分子という物質を必ず探し求めることが出来るとも言われています。こんな事は出来ないか、あんな事もしてみようといった狙いを持って、原子やアミノ酸等々といった“積木”を積み上げて行くことはエキサイティングではないでしょうか？特徴ある性質が利用できるとき、我々は物質は“機能”をもっているといえます。出来あがった物質の性質を調べ、機能発現の機構を明らかにするのも、積木を積み上げる以上に興味があり大切なことです。これは物性物理・化学と呼ばれています。このためには、力学、熱学、電磁気学、量子力学等々といった学問体系を一步一步積み上げて勉強して行く事になります。物質生命科学コースでは、物理・化学・生物にまたがる学際的研究を、こうした視点から展開することもできます。

一般的な物質科学のことを書いてしまい、私自身の研究について詳しい紹介をしませんでしたが、皆さんとは“基礎物理学”の講義でいつも顔を合わせますので、また機会をみてお話したいと思います。しかし、研究の本物の面白さはやはり現場の体験からです。どうぞ遠慮なく一度研究室を覗いてみて下さい。

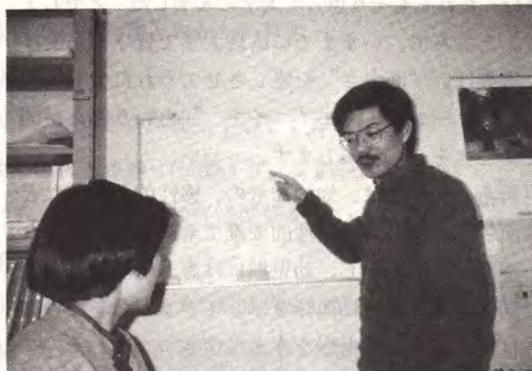
今年、総合科学部の7コース中、最も新しいコース、外国語コースから初めて卒業生が送り出された。そんな中で研究室紹介をやる事になったものの、外国語コースではコース所属学生数に対して外国語担当教官数が相対的に大きい、という広島大学全体の一般教養の機能を担う総科らしい特質のため、学生が各教官の研究室に所属している訳ではなく、教官と学生の関係は卒論指導のみ、と他コースとはちょっと毛色の変った様相を示す。

今日紹介させていただくのは、これまた移転前の広大ならではのプレハブ1号棟1階にある山田純教官の研究室である。もっとも上記の様な理由で、学生と教官の相互関係の場としての「研究室」ではなく、あくまで教官御本人の研究の紹介になってしまった事を御了承願いたい。

山田教官が専門とされているのは心理言語学 (psycholinguistics) と呼ばれる日本ではまだ新しい学問で、1言で言うと言語の学習、修得のプロセスやメカニズムを解明しようとするものだと言う事である。具体的には英語の「できる子供」と「できない子供」との間にはどのような違いがあるのか、と言ったテーマについて研究を行っておられ、『英語学力差はどこから生じるか』『ことばを心理する』等の本を著されている。このテーマの場合、音素 (phoneme) を識別する能力の低い子供が落ちこぼれやすい、といった傾向があるそうで、どうすればその能力を開発できるか、将来的には研究をしてゆきたい、との事だ。

研究手段としては、実際に小中学校へ行き、国語や英語のテストだと子供達には思わせておいて、データを収集する実地調査と、文献に当たる調査がほぼ半々だと言う事である。

学生に対しては、トピックスが広いので、講義形式で授業を行い、その中から学生が自分の興味のある分野を開拓してゆく、という形をとっている。今年先生が指導された学生の卒論題目は、「Recognition memory for English words and Japanese words under an incidental condition (偶発条件下における日英単語の再認記憶)」といい、何でもあらかじめ見せた英単語群を、一連の文章の中からいくつひ



ろい出せるか、といった調査に基くものだそうで、ちなみにA4約30枚、全文英語である。外国語コースのI群(英語)は全員そうだという事なので、志望されている学生の方々は覚悟の程を。

以上、門外漢の聞き書きで一歯切れの悪い事極らない紹介でしたが、山田先生の研究や外国語コースについて興味を持たれた方には、実際に研究室を訪ねたり、先生の授業、言語応用論(6セメ)を取ってみたい事をおすすめします。

な の あ る ひ と 有 の 名 人

昔に比べると、世の中に名を出し易くなったような気がする。

新聞や雑誌を開くと、少なくとも一箇月に一度は「タレント研修生募集」とか「〇×事務所オーディション実施」とか広告が出ているし、それらほど頻繁ではないが「××新人賞メ切迫る」だの「〇〇大賞賞金百万」だのにもよくお目にかかる。そこまで目立たないにしろ、出版社への持込日なるものが設けられたり、常時小さなコンテストが行われたり、いちいち数えるのも面倒なくらい、世の中に名を出すチャンスが開かれている。

そして、それに応じてメディアに出現する「名の有る人」の数も、昔とは比較にならない。ちょっとしたきっかけと、ちょっとした才能とがあれば、誰でもメディアにデビュー出来るようになったのである。「タレントになりたい」「アイドル歌手になりたい」「マンガ家になりたい」等々と思っている若者の数は相当に多いらしいが、今のような時代状況は、彼ら（と人ごとのようにかいている私も、実は“等々”と思っているひとりではある）にとっては願ってもない素晴らしい状況のように見えるかもしれない。

しかし、決してそうではないのだ。確かに「名を出す」ことは数段たやすくなった。だが、その名を売ること、そして一旦得た名声を保つことは、相変わらず困難である。競争者がやたら増えただけに、かえって状況は厳しくなったとも言えよう。加えて、増大するメディアの受け手の需要に応えるべく、送り手側が「才能」を発掘し世に送り出そうと新人賞だオーディションだと騒動するから、競争者は増える一方である。かくして、「ちょっとした才能」の持ち主たちはメディアの視野に右往左往してひしめき合い、肝腎の山頂では昔と同じように、ほんのひと握りの才能の持ち主たちだけが華と輝き、その代償として、マネージャーにせきたたられながらスタジオからスタジオを飛び回ってファンにもみくちゃにされるわ、編集者にメ切を突きつけられてホテルに缶詰にされるわの羽目になるわけである。

もっとも、世に出るチャンスが増えたおかげで、本当に才能のある人が正当な評価を受けて日の目を見、「名の有る人」となる確率も、多少は上がっただろう。その功まで斥ける気はない。それに「ちょっとした才能」だって、世に出て磨き磨かれれば本当の才能になるかもしれない。そう、生存競争の激しい中をそうして勝ち抜きさえすれば、そこにききと、目の回るような「名の有る人」の生活が待っている――

と良いのだけれど。

(文責 定行 美佳)

沼田研修とは

毎年広工大沼田校舎にて総合科学部の教職員及び一回生が参加して行い一泊二日の研修。

一通りの説明が終わってからの質問の時間をおおいに活用すべし。自分のやりたい分野がこのコースでできるのか、専門の先生はいるのか、等わからないことを聞きまくろう。先生方も詳しく教えてくれるし、こんな機会は他にない。二日目の第二志望のときも同じ。

その目的

1. 寝食を共にすることによって学生どうし、教職員どうし、及び相互の親睦を深める。
2. 自分の志望するコースについて詳しい情報を得て二次からのコース決定の参考にする。

そういえばエレキギターを持ちだして「マリオネット」とか歌っている人がいたっけ。しめはやっぱり「安芸の国」!

6:30		9:00		13:00		14:30		17:00		18:30		20:30		22:30	
起床	朝食	自由時間 (第二志望)	コース別説明会	自由	昼食	球技大会	清掃	去大者 解散	夕入浴	夕食	オリエンテーション	エ大者	去大者 解散	去大者 解散	去大者 解散
前日聞けなかったところがある人は昨日の同じ第二志望の方に生まれこい質問してもかまわない								17:00				おつかれ様でした。明日から授業が始まります。			

この時間に限らず暇なときはロビーに広げている資料を閲覧するとよい。先輩達の卒論の題名とか、先生方の記入済みのアンケート用紙などがあってなかなか興味深いことになる。「この先生の字カワイイ。」とか。

バレー・ソフト・テニス等のチームにわかれて対戦する。去年は学生だけでやったけど、ヒマそうに見物していた先生方とも一緒にプレーできたらもっとおもしろかったのではないかなと思う。お若い先生方もいらっしゃるのだから……。

原則として参加は自由だが毎年ほとんどの総科生が参加している。なおこの沼田研修を学生側でお世話するのが**連絡員**である。連絡員は入学して最初のチューター別顔あわせのときにそのチューターから一名選出される。部屋割りやパンフレット作りや司会など、学生側で沼田研修を企画する。おもしろそーだなどおもった君は是非連絡員に立候補してくれたまえ。

新入生諸君!!
夏休み明けには
沼田研修 があるよ
例えば去年はこんな感じ
89' 9/1, 2



広工大
沼田学舎



バスで約一時間



松本



森戸に巨大なバスが数台出現し他学部
の注目を浴びる。約一時間後、山
中の広工大沼田校舎に到着。あ
ー空気がおいしい!

花をいける「かたち」と「ころろ」

—おぼえていますか銀河鉄道999—

池田夢瞳

(花芸「安達流」主任教授)

はじめに

本年度第2回の教養講座が、6月21日(水)15時10分から17時まで、総合科学部の305号室で約40人の学生を集めて行われた。お花の話は、教養講座としては初めての試みでした。ところで、私達はわずか一輪の花が、一つの空間を美しく、かつ潤いのあるものにすることを知っています。日本人は、生け花に日本の心や美を託してきました。

池田先生は、花芸安達流の主任教授をされながら、「花の心、日本の心」(「広島人」16号、1985年)の論考を発表されるなど、お花の世界を通じて文化的、社会的活動を幅広くしておられます。当日のお話しは、常日頃から先生が、花芸あるいは生け花を包む奥深い世界に強い関心を持って洞察しておられることがよくわかる内容でした。

スライドも使われた講演は、内容に含蓄のあることは無論のこと、板書きの文字の色と配置まで、配慮され、さらに花を生ける際の気持を解説しながら実演もされました。終了後ある学生が、「暑い日でしたが、とてもさわやかで涼しい気持ちになりました」と言って立ち去りましたが、これは先生の話をお聴いた私達の共通した気持ちでもあったと思います。

要 旨

副題に「銀河鉄道999」としましたのは、機械人間よりも限りある命の生身の人間の方が尊いのだという、このアニメの主題が本日の私の話の内容を象徴しているからです。生け花の最大の特徴は、この「限りある命」ということだろうと思います。一方で生け花は、自然の花を切らないと成り立たないというパラドックスがあります。

私達は、桜の花に愛着を感じるのも、限られた命が移ろい行くことにむしろ美しさを感じてきたと思います。私は、これを「移ろいの美学」と呼んでいます。例えば、川端康成がノーベル賞授賞の記念講演の冒頭に掲げた、道元禅師の「春は花夏ほととぎす秋は月 冬雪さえて冷しかりけり」という歌には自然の循環の中で移ろいゆく自然の姿がよく示され



ています。また、西洋の庭は対称で視点が固定され、日本の庭は非対称で視点が動くことが前提になっているのも、移ろいの美が形に表現されたものだと思います。外国人も日本について同じようなことを指摘しています。

次に私は、「否定の美学」とか「余白の美学」というものがあると思います。例えば、千利休の庭の見事な朝顔を見るため訪ねた秀吉に、利休は庭のすべての朝顔を切り取り、床間にただ一輪、露に濡れた朝顔を生けて迎え入れました。その美しさに秀吉は思わずかたずを飲んだという、いささか出来過ぎた逸話があります。これと対照的な話は、クレオパトラが恋人を迎え入れるために、薔薇の花で敷詰めたといいいます。日本の掛け軸などの絵には、余白を残したものが多くのですが、西洋の絵画は、背景も一色塗られたものが多いように思います。

一休の歌に「心とはいかなるものをいふならむ 墨絵にかきし松風の音」というのがあります。余白の部分には、松林を渡る風の音が描かれているのです。書道でも、黒で白を、すなわち墨で白い空間をかくのだと申します。

私どもは、お花を生けるときも、お花を生けるのではなく、その空間を生けるということなのです。

(文責：学生生活委員会教養講座担当・堀 信行)

芸術・ひと・風土

— 絵画の見方 —

大沢寛三氏

(ひろしま美術館 常任顧問)

はじめに

第3回の教養講座は、「芸術の秋」にふさわしく美術鑑賞に関する講演で、10月25日(水)15時10分から16時50分まで、総合科学部305号室で約60名の学生を集めて行われました。講師の大沢寛三先生は、長らくひろしま美術館の副館長をつとめられた方で、美術史家として『ゴッホとひろしま美術館』・『20世紀の絵画』・『日本西洋事始め』など、多数の御高著をだされています。

「三種の神器」は時代とともに変わり、今日の若者たちにとってステータス・シンボルはCarなどの“3C”のようです。しかし、物質的な繁栄や便利さを追い求める一方で、ようやく本当の「豊かさ」に対する関心が高まっています。これからの高齢化社会を支えるのは若者たちですが、美術館が若い女性や学生でいっぱいなのは、このことの一つのあらわれと言えるでしょう。

講演のいわばパートIは、「芸術とは何か」・芸術の世界性と地域性・東西の風土(モンスーン型・砂漠型・牧場型風土)とその影響が生み出した芸術、についての話でした。パートIIは、絵画を通してヨーロッパ精神に触れるという魅力に溢れたテーマをめぐるもので、幅広くかつ奥行の深い話でした。日本の浮世絵にみられる特色と、それがヨーロッパの絵画に及ぼした影響についても説かれたし、最後には、古今東西の代表的な芸術の特色がスライドによってわかりやすく解説されました。「絵画は哲学であり学問である」(レオナルド＝ダ＝ビンチ)のであれば、先生の講演はすばらしい<学問のすすめ>でした。お話の内容を正確にまとめるのは難しいのですが、以下要点を紹介いたします。

要 旨

人間は知性・感情・意志のほかに欲望というものをもっている。人は、何かに感動したときその感動を表現したいという欲望につき動かされるが、そうした表現(創造)欲の産物が芸術である。したがって、芸術とは作者の心の表現方法である。絵画につ



いてみると、絵は黙って壁に掛かっているが、実は有弁に見る人に語りかけている、無言のパントマイムであると言える。つまり、線・色彩・構図といった造形言語によって作者の心を伝えようとしているのである。このことを歴史的にみると次のように言える。合理的・現実的な表現を好む古代ギリシャは線(デッサン)が重視され、線によってモノの形がはっきりと表現された。用いられた色は固有色であり、画面全体のつくり方はシンメトリーであった。こうした特徴をもつ古代ギリシャやローマの芸術は、ルネサンスを経て、17世紀フランスの古典絵画として根づいた。描かれたテーマは主としてギリシャやローマの神話伝説であり、理想化された描き方が行われた。線が重視され、固有色で描かれ、構図はシンメトリーであった。また、ルネサンス以来の厳密な遠近法が用いられた。しかし18世紀末にフランス革命が起こり、古典絵画を支える旧体制が崩壊すると、芸術界には自由の風がふき、さまざまな個性がさまざまな流派を生み出した。こうして新しい美の探求が始まった。ギリシャ以来の線の絵画やシンメトリーなどの伝統が崩れて、線よりも人の心に直接働きかける色彩に重点が移り、静よりも動を、また再現芸術ではなく心の中(精神性)を重視する芸術がおこった。19世紀半ばには、色彩の美しい、構図の大胆な浮世絵がゴッホなどに大きな影響を与えた。こうして革命の標榜した「自由」が、今日まで芸術の基調となっている。

(文責: 学生生活委員会・友田 卓爾)

環境の社会史

—環境問題と住民の役割—

鳥越皓之先生

(関西学院大学社会学部教授)

はじめに

本年度第4回目の教養講座が12月6日(水)15時10分から17時10分まで、総合科学部の305号室で110人を越える学生を集めて行われました。最近、政治問題はもとより、温暖化・オゾン層の破壊・酸性雨など地球規模の環境問題で球全体が騒然としています。

鳥越皓之(ひろゆき)先生は、「水と人の環境史」や「環境問題の社会理論」などの出版を通じ、精力的に環境問題に取り組まれています。とくに足元の環境問題から他の国や地球を考えようという、「生活環境主義」の立場を主張されています。

当日は、先生の人格と、解り易く説得力あるお話に魅了されました。質疑応答も活発で熱気ある講演会となりました。



要旨

本題が「環境の社会史」ですが、科学論もお話することになります。環境問題は既成科学を批判的に見ざるを得ないからです。私は農村社会学の専攻でした。それには幾何学模様の様な体系的理論があり、それらを駆使し変形して研究をしていました。しかし、それらに疑問を抱きながら私は環境問題の研究に取り組んでいます。

虚学と実学を考えながら、既成科学批判を少ししたいと思います。その特徴は、17世紀以来の西洋思想を継承して、全体主義に対し要素主義、特殊化に対し一般化、主観に対し客観を重視するものです。この立場だけでは、例えば水の成分や濃度は指摘しても、きれいな水か汚い水かという生活上必要な答は得られません。

ところで現在地球上では、砂漠化が年間600万ha、熱帯雨林の破壊が1,100万haの速さで進んでいます。しかし本日の話は、私達の足元からどの様な考え方や対応ができるかに焦点を当てたいと思います。

日本の環境問題は、三つあります。第一は、水俣や四日市に代表される産業公害で、現在は下火になりました。この公害は、江戸時代にも塩田の煙害、

鉱山からの悪水問題、水車の水流阻止や土手破損などがありました。第二は、1970年以降増加した、騒音や臭気や日照権などの迷惑公害です。第三は、被害者が加害者でもあるという環境問題が、1980年以降顕著になってきました。例えば、合成洗剤などによる生活排水汚濁の問題などです。この様な公害問題に内在するジレンマには、牧人のジレンマと囚人のジレンマがあります。前者は、例えばある酪農家が勝手に牛の頭数を増やしたため他の酪農家がだめになるというものです。マンション建設に伴う周辺住民の環境悪化などはこれです。囚人のジレンマは、脱獄計画を密告すれば救われるというので囚人相互が密告しあい、結局全員が救われないというものです。このジレンマ論に対する答は出ていません。一つの答は、規則で規制しようという管理強化論です。しかし私はこれに疑問を抱いています。生存レベルではなく生活レベルの理論構築が肝要です。

琵琶湖周辺で戦前の方が水がきれいだったのは、技術的に現在の流域単位の大規模処理ではなく、他域単位の個別的処理方法があったからです。また思考も民間信仰などによる一種の信念を住民が持っていました。新たな社会史的知恵の模索が望まれます。

環境問題には、3年以上の長期闘争の持続、地元組織的団結、行政との継続的接触が必要です。

(文責：学生生活委員会教養講座担当・堀 信行)

自然を相手のスポーツ登山

種村重明先生
(広島県山岳連盟副会長)

はじめに

本年度第5回の教養講座が、1月24日(水)15時10分から17時10分まで、総合科学部の305号教室で約50人の学生を集めて行われました。自然に親しむことがいわれて久しくなりました。現代は身体を鍛え、健康の保持に強い関心が持たれています。これは我々の生活環境から自然が遠のき、不健康な生活が日常化していることへの警鐘でもありましょう。こうした事情を反映してか、各種スポーツが普及し、それ用の諸施設が多く造られています。

これらの中で自然相手のスポーツは独自の位置にあり、登山はその代表的なものです。かつて山は登山の対象でなく、人里に恵みを与え、自然の霊力が発現する奥深い空間でした。登山の歴史は、こうした文化的・精神的世界ともかかわってきました。

お話いただいた種村重明先生は、30年以上も登山に親しまれ、広島県のスポーツ登山の普及と教育に指導的役割を担ってこられました。丁度冬山の季節でもあり、教養講座としても登山を初めて取り上げました。当日は先生の真摯なお人柄が、淡々としたお話ぶりににじみで、山への限りない愛着が先生の人柄をつくり、支えているのかと思うほど味わい深い講演となりました。

要 旨

私は、学生時代に本当によく山へ出かけたものです。結婚後も山に一ヶ月位入りましたので、下山してみると我がワイフは実家に帰り不在、頭を下げに何度も行ったのが懐かしく思い出されます。

さてここで、他のスポーツと比べた登山の特徴を挙げてみましょう。第一は、競技場がないことです。場所が自然ですから気象条件ともかわり、危険かどうかの判断能力が問われます。これが登山の難しさであり魅力です。第二は、観客がないことです。第三は、審判員がないことです。ということは何をしてもよいのですが、安全限界やモラルがあって、登山者は自立し自主性をもって自身を律せねばなりません。第四は、競争相手、つまり敵がないこと



です。自然相手ですから、自分の心との戦いです。登山はこれがとくに顕著です。登山の面白いところは、自分の経験や実力に応じて、相手である山を選ぶことです。逆に高度なものにいくらでも挑戦できることです。第五は、日常生活に埋没した自分が、自然を介して蘇生できることです。第六は、登山は、24時間のスポーツです。家を出てから家に帰るまでが登山です。と同時に、これは計画を立てて準備をする楽しさがあるのです。地図を広げて経路の決定、それによって決まる装備、出発前からの天気図の作成、食料の用意など楽しいものです。

登山家でマナスルにも登った嶺氏は、「登山というのは、一番美しい処へ、一番楽しいスポーツをすることだ」と言っています。それほど思い出深い経験ができるのです。登山は、ザイルと一緒に登り、寝食を共にするので、人間的触れ合いが親密になります。山の友は一生の友になります。私にも毎年こうした教え子達がいて、いまだに私と妻を呼んでくれます。教師冥利につきます。

西洋では、自然と人間の関係は対立的で自然を克服しようとし、東洋は、自然を「じねん」と呼び、自然と共存しようとし、自然そして山への畏れが登山の魅力になっています。

(文責：学生生活委員会教養講座担当・堀 信行)

平成元年度卒業予定者進路状況

区分	コース	地域文化	社会文化	外国語	情報行動科学	環境科学	計
卒業予定者数		27	32	10	28	41	138
企業		14	24	6	13	15	72
公務員		4	2		1	6	13
教員		1	2	1		3	7
進学希望		4	2	3	10	13	32
その他		4	2		5	4	15

就職内定企業名

(平成2年3月15日現在)

地域文化	社会文化	外国語	情報行動科学	環境科学
広島 Y M C A	日本電気プリンティング	大日本印刷	岡山日本電気ソフトウェア	国際航業
広島総合銀行	広島ソフト・エンジニアリング	N H K	環境調査技術研究所	N T T
東急ハンズ	テレビ新広島	全日本空輸	松下電工	大和ハウス工業
インテック	西日本旅客鉄道	日立製作所	ソニー	日本IBM
新日本製鉄	日本電気	広島ソフト・エンジニアリング	日本IBM	復建調査設計
大日本印刷	西部電機	マツダ	松下電器産業	小野田セメント
日本電気ホームエレクトロニクス	兼松江商		関西日本電気ソフトウェア	フマキラー
東京海上火災保険	京セラ		日本電気プリンティング	名古屋鉄道
中国日本電気ソフトウェア	中国新聞社		日本電気	松下電器産業
富士通システムエンジニアリング	タカキベーカーリー		クラレ中央研究所	東亜医用電子
中国新聞社	イトーヨーカ堂		埼玉銀行	松下電器情報システム広島研究所
ニチイ	カゴメ食品		日本メディカルサプライ	アイシン精機
マツダ	毎日新聞社			パスコ
	第一勧業銀行			川鉄システム開発
	天満屋			住友化学工業
	西武百貨店			
	東芝			
	日立中国ソフトウェア			
	広島銀行			
	N H K			
	中国日本電気ソフトウェア			
	四季の旅社			

特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース (指導教官)	氏名	論文題目名
地域文化		
(金田)	鈴木 憲敦	健康の概念を巡る一考察
(山下)	浜田 公司	アフリカ地方都市研究
(村上)	宮崎 尊弘	広島市街地における土地利用の高度化
(水島)	中井 千尋	カフカ研究—カフカの作品における「音楽」の意味について—
(囀府寺)	足助 辰雄	ゴシック建築研究
(村上)	渥美 悟	日本のリゾートに関する研究
(志邨)	岩崎 佳孝	ジャクソン期のインディアン政策～“文明化”の視点からの考察～
(朝倉)	牛方 祥子	芸北における文芸(旧殿河内地域を中心として)
(福嶋)	内山 章子	エーリヒ・ケストナー『ファービアン』について
(青木)	大石 和久	クリスチャンメッツの映画論—映画の62号学的分析—
(福嶋)	川元 克己	ヘルマン・ヘッセ『メルヒェン』研究
(志邨)	木村 実紀	FBIの誕生～J・エドガー・フーバーを中心～
(山尾)	斉藤 知志	19世紀初頭におけるイギリスのシンガポール進出とラッフルズ
(志邨)	角 健二	ケネディ政権のヴェトナム外交
(嶋)	妹尾 あき子	ガムラン・ジャワ・インドネシア—芸能と社会の関係—
(川邊)	竹内 雅代	アメリカにおける小売売上税の導入に関する一考察—ニューヨーク市を事例として—
(楠瀬)	竹下 聡美	旧満州国への国策移民—大陸の花嫁たち—
(川邊)	田村 佳子	アメリカにおける老人パワーの台頭とその背景—AARPの活動を中心にして—
(陣崎)	戸田 貴裕	パール：ホーソーン『緋文字』のなかの象徴表現の研究
(山尾)	堂山 秀世	マレーシアにおけるブミプトラ政策についての一考察
(川邊)	中村 美千代	「アメリカにおけるクレジット・カード急増の社会的背景」—1950S後半～60S前半の銀行系クレジット・カードの急増を中心として—
(上杉)	西川 和子	『シヨンの囚人』試論—<閉ざされた世界>と<開かれた世界>—
(楠瀬)	錦織 美紀子	中国の人口の問題—一人っ子政策を中心に—
(頼)	濱田 孝	「南方熊楠の思想」研究—仏教との関わりを中心に—
(戸田)	吉武 弘江	『ボヴァリー夫人』論—エマの自己破壊への導かれ方—
(立川)	吉田 美由紀	フランス人種差別禁止法の周辺—在仏移民労働者に対する差別の実態—
(志邨)	若林 由美子	「全国禁酒法と女性」
社会文化		
(伊藤護)	小山 祐司	瀬戸内法の現状と課題
(舟場)	石井 真由美	ASEANの経済発展と日本の直接投資—マレーシアの事例研究を中心に—
(舟場)	植木 伸子	日本の政府開発援助に関する一考察

(舟場)	小川 恵美子	地域開発としてのリゾート開発の現状と問題点 (長崎オランダ村を例として)
(田村和)	杓掛 美保	ごみ問題
(芝田)	坂本 憲昭	「平和教育運動と広島に関する一考察」
(森)	坂本 ひろえ	英委任統治下のパレスチナ、アラブ
(鯨坂)	笹口 陽子	日本社会と「国際化」—在住外国人問題を中心に—
(秋葉)	澤江 暁子	都市の緑の変遷と現状—今後の緑化対策とのかかわりで—
(森)	洲之内 隆典	「イラン・イラク戦争の分析」
(岩田)	高岡 智靖	「ソ連の民族問題～ベレストロイカとの関連を中心として～」
(富井)	高田 英夫	瀬戸内海水質環境保全行政の現状と課題—COD・リン規制を中心—
(岩田)	高山 眞一	「日ソ関係の考察～ゴルバチョフ登場以後の経済関係を中心として～」
(伊藤護)	瀧山 正浩	「干拓地における排水問題の一考察」
(岩田)	多田 慎	北方領土返還の可能性の分析～ゴルバチョフの対日外交政策からの考察～
(森)	田中 雅子	「シーレーン防衛を考える—非軍事的プレゼンス展開の必要性—」
(舟場)	出川 浩明	「言語と生」
(舟場)	内藤 千恵美	タイのNAIC戦略とアグリビジネス・グループ
(鯨坂)	中田 方夫	「単身赴任問題に関する一考察」
(鯨坂)	波藤 裕子	日本の社会集団の特質—日本の家と企業—
(中峯)	林 秀樹	戸坂潤の「技術的なるもの」について
(伊藤護)	原田 浩一郎	総合保養地域整備法の現状と課題
(清水)	広池 修治	「ジャジマニ・システムの研究」
(田村和)	松岡 美江	「地域福祉の主体形成と福祉教育」
(舟場)	松永久美子	「我が国鉄鋼業の変貌～リストラクチュアリングは鉄鋼業に何をもたらすか～」
(芝田)	松本 聡	「被爆都市広島の後再建についての一考察」
(志村)	松本 ひろみ	「現代産業社会における広告」
(中峯)	矢口 文恵	現代軍事技術の民間への波及効果についての考察
(志村)	山手 涼子	カードビジネス～流通系カード急増の背景
(志村)	万木 理賀	「日本の農業におけるバイオテクノロジー利用の可能性」—千宝菜を中心にして—
(中達)	吉田 智恵美	イラン・イラク紛争勃発の背景
(森)	ロベス ガブリエラ	「南極と日本」
外国語		
(山田)	阿津地 朋子	Recognition Memory for English Words and Japanese Words under an Incidental Condition—偶発条件下における日・英単語の再認
(安部)	有福 教美	CROSS-CULTURAL ADJUSTMENT OF FOREIGN RESIDENT IN JAPAN—A CASE STUDY OF FOREIGN LANGUAGE TEACHERS AND ENGLISH CONVERSATION SCHOOLS
(安部)	梶田 智子	—在日外国人の異文化適応：外国人教師と英会話スクールの場合 INTERCULTURAL ADAPTATION AND ITS PROBLEMS—A CASE STUDY OF JAPANESE LIVING ABROAD—異文化適応とその諸問題— 海外日本人滞在者の事例研究—
(佐野)	金行 宣佳	A Contrastive Study of English and Japanese Expressions and Their Readings—From the Viewpoint of MONO and KOTO— (日英語の表現及び解釈に関する対照研究—モノとコトという観点から—)

(春 田)	児 玉 裕 子	Ciaucer's Clerk's Tale and Its Narrator: A Study in Cultural Backgrounds
(リナート)	佐 藤 彰	カンタベリー物語における学僧の話とその語り手—文化的背景の研究— INITIATORS' STRATEGIES IN OPENING PHASES OF CONVERSATION IN AMERICAN ENGLISH (米語会話の導入段階におけるイニシエーターのストラテジー)
(リナート)	中 田 真 帆	Moon-viewing vs Star-gazing: A Study of Images Concerning the moon and stars in English and Japanese (「月見」対「星観」—英語と日本語における月と星のイメージの研究)
(小林ひ)	久 田 真里江	VIETNAMESE REFUGEES' JAPANESE LANGUAGE ABILITY AND ITS ROLE IN RESETTLEMENT PROCESS IN JAPAN ベトナム難民の日本語能力と定住過程におけるその役割
(リナート)	藤 岡 真 由 美	Terms of Address for Mamage Partners: A Comparative Study of American English and Japanese (配偶者に対する呼称詞の研究、アメリカ英語と日本語の比較対照)
(佐 野)	森 井 宏 美	On the Syntax and Semantics of BE and Its Japanese Analogues (Be動詞 の統語論・意味論と日本語の対応形について)
情報行動科学		
(水 上)	渡 部 美 代 子	線形—2次ゲーム問題における線形誘導戦略に関する研究
(杉 本)	頃 末 敦 夫	フローティングの人に及ぼす効果—誘発電位及び右脳課題を用いて—
(桑 田)	伊 藤 真 奈	組合せ理論とその応用
(重 中)	岩 見 暢 浩	太陽虫における微小管の超微形態学的研究—有中心粒目 <u>Sphaerastrum</u> の観察より—
(樹 下)	上 田 祐 彰	CMOS 論理回路の故障シミュレータに関する研究
(天 野)	上 野 竜 也	アフリカツメガエル3倍体キメラ幼生における生殖腺の成長・分化
(堀 忠)	岡 雅 美	刺激剤減および騒音暴露状況下における喫煙効果の精神生理学的検討
(林 春)	岡 崎 水 弥	ステレオタイプの認知の形成過程に関する実験的研究
(小野寛)	岡 原 俊 幸	ラムダ計算に関する研究
(堀 忠)	加 古 直 子	連続作業中の仮眠の効果
(宗 岡)	黒 木 義 弘	コナガニンから単離した生理活性ペプチドの構造と生物活性
(内 山)	米 本 健 治	ヒト白血球細胞の分化誘導において、細胞増殖の調節に関与する遺伝子のクロー ニング
(上 里)	坂 本 安 代	孤独感と自己開示に関する研究
(杉 本)	多 久 和 学	学習性無力とその脳内電気現象
(前田渡)	田 中 香 織	グラフの平面性判定アルゴリズムに関する研究
(上 里)	中 川 弘 己	青年期における孤独感
(黒 川)	永 江 智 子	関係の一時的性と持続性が報酬分配に及ぼす効果に関する実験的研究
(藤原武)	林 原 理 江	送り手の身体的魅力と受け手の認知欲求が態度変容に及ぼす効果に関する研究
(堀 忠)	檜 山 典 子	入眠期の脳波パターンと行動指標との対応
(宗 岡)	福 田 功	ミドリムシ葉緑体におけるPSII複合体構築過程の転写レベルでの制御に関する 検証
(水 上)	普 家 浩 文	非線形システムにおけるファジイコントローラの設計法に関する研究
(黒 川)	藤 原 しのぶ	夫と妻の役割と相互依存関係に関する実証的研究
(小林惇)	藤 本 克 幸	アフリカマイマイ心臓抽出物質の構造と生物活性
(内 山)	藤 原 千 絵	ヒト白血球細胞の分化誘導に伴い、早期に発現する遺伝子に関する研究
(藤原武)	船 津 信 之	映像志向性と大脳半球機能差に関する実証的研究
(前田渡)	山 田 美 治	変換符号化による画像情報圧縮に関する考察

(重中)	吉田 かおり	真性粘菌 <i>Physarum polycephalum</i> 変形体の超微形態学的研究
(前田渡)	渡辺 順子	コンピュータによるグラフ理論の一応用
環境科学		
(桜井)	倉田 信一	矮性エンドウの茎生長における細胞壁の役割
(大林)	上田 謙吉	$YBa^2(Cu_{1-x}Zn_x)_3O_{7-8}$ の超伝導性と赤外異常
(佐田)	松本 兼二	広島県二豊系刈田層の層位学的研究
(中根)	森山 泰人	都市近郊固有林の住民による活用と保全のための試案作り
(檜原)	藪田 久人	価数揺動物質 $YbIn_{1-x}MxCu_4$ ($M=Ag, Au$) の磁性
(根平)	足達 伸司	山火跡地における人工緑化地の生態学的研究
(中根)	安橋 恒明	自然再生植物群落と人為的再生植物群落における塩類循環の比較研究
(堤)	飯田 晴彦	楕円形偏微分方程式の解の滑かさについて
(堀信)	池田 秀司	広島市の地表物の立体化に関する地理学的研究
(渡部)	井上 晃司	Simulated Annealing による最適化問題の研究
(堀越)	井上 尚子	管理法の異なるいくつかの農耕地における微生物バイオマスの測定
(古前)	加藤 幸一	ハクウンボクに含まれる魚毒成分の構造研究
(栃木)	神信 浩一	高知県大川村小松地区における地すべり調査とその考察
(佐田)	河田 克也	大分県津久見石灰岩の資源論的研究
(高島)	木村 英夫	ネオジム系磁石材料の物性研究
(宇田川)	国井 隆史	光散乱用希釈冷凍器の高冷凍能化
(坪田)	熊本 雄一郎	沿岸近海域における栄養塩類物質の挙動
(藤原 祺)	古城 理恵	全反射長光路セルを用いる吸光、蛍光光度法の研究
(田村 剛)	坂口 佳史	液体セレン-テルル混合系の光吸収スペクトル
(大林)	佐々木 秀和	固体ヘリウム4のラマンスペクトルと偏光特性
(倉石)	貞徳 清	生体内に存在するサイトカイニンの生理活性
(開発)	城ヶ崎 正人	1988年7月広島県北西部に発生した土石流災害に関する調査
(山下)	杉田 智則	有機・光表示素子材料の基礎的研究
(根平)	曾宮 和夫	広島県加計町の植生
(高橋 史)	田中 雄二	山火事跡地小流域での河川水流出解析
(古前)	田辺 洋子	ヒトクチタケに含まれる甲虫の誘引物質
(栃木)	中井 真司	島根県益田市大滝地区における地すべり調査とその考察
(岩上)	中川 裕治	2次体と円の l 分体 (l は奇素数)の整数について
(松田)	永田 純一	The Study of Narrow Resonances in the polarization-data of ELastic P-P Scattering 『陽子-陽子弾性散乱の分極データにおける狭巾共鳴』の研究
(武森)	名和 桂子	ウシ副腎皮質培養細胞でのアンドロゲン生合成機構
(福岡)	二宮 昌子	非都市温度日の原因に関する局地気候学的研究
(板野)	野口 真理子	開像像定理について
(開発)	土師 弘	TDR・テンシオメーター法を用いた土壌水分特性曲線と不飽和透水係数測定に関する研究
(田村 剛)	日浅 裕子	液体カルコゲナイド半導体 As_2S_3 および As_2Se_3 の光吸収スペクトル

(堀 信)	開 沢 欣 也	岩国市南西部における活断層の地形学的研究
(福 岡)	平 中 純	呉における局地気象と大気汚染の関係について
(江 口)	藤 井 達 也	コンパクト群上の調和解析
(山 下)	松 元 浩 二	光電解法による画像形成
(武 森)	丸 本 朝 清	ステロイドホルモン産生臓器のアンドロゲン合成機構
(岡 野)	宮 本 貢	中国産ニガキ科植物の成分検索
(藤井博)	山 本 研 一	水素吸蔵特性をもつ機能性複合材料の開発とその特性変化

II 修士論文

研究科 (指導教官)	氏 名	論 文 題 目 名
地域文化		
(戸 田)	前 田 智 子	グレゴワールにおける革命と宗教
社会科学		
(藤井守)	谷 本 圭 司	蘇東坡論—宋代知識人の生活と思想
(永 尾)	舟 津 洋 良	初期漱石文学研究『文學評論』における価値観
(金 田)	吉 村 千 賀 子	パウル・クレー研究
(舟 橋)	酒 井 敏 之	ダニエル・デフォーと南海会社—デフォー「トレイズマン」像の形成—
(永 尾)	張 建 明	「漱石の笑い」試論—「猫」を中心にして—
(原 正)	藤 本 義 彦	国際連合における南アフリカ問題の一考察；総会における加盟国の投票行動分析を中心として
(関)	石 塚 公 康	日本における高等教育段階の外国語教育に関する研究—戦前期を中心とした歴史的考察—
(藤井守)	小 田 美 和 子	陸游研究—梅を主題とした作品をめぐって—
(米 田)	潟 山 健 一	南イングランドにおける民謡の風土—民謡の風土的考察—
(原 正)	姜 弘	「香港返還問題」
(木 村)	陳 雄	中国の対外経済開放政策及び日本との経済交流
(村 上)	二 宮 英 幸	郊外集団住宅地域の開発とその拠点性—広島都市圏・高陽地区を事例にして—
(森)	伴 野 昭 人	『占領期における北海道開発庁設置経緯』
(米 田)	古 川 哲 史	イギリスにおけるカリブ系移民社会の形成と展開
(朝 倉)	森 野 知 子	中巖圓月詩研究—中国文学受容の一側面—
(陣 崎)	吉 田 徹	Mark Twainのユーモアとその素材
(村 上)	ワンペン デスクバクル	日本の女子労働に関する一考察
(小 林)	ウィッグ・ローレンス・マキン	「日中戦争期・米中関係の研究—日系米人コージ・アリヨシの行動と役割を中心にして—」 "SINO-AMERICAN RELATIONS DURING THE SINO-JAPANESE WAR OF 1937-1945: A STUDY CENTERED ON THE ACTIVITIES AND ROLE OF KOJI ARIYOSHI. A JAPANESE-AMERICAN, DURING THAT WAR"
(山 下)	スティティ・ハワマジド	シャープにおける本社と子会社の関係：SRECのケース THE HEADQUARTERS - SUBSIDIARY RELATIONSHIP IN SHARP CORPORATION: THE CASE OF SREC
(山 下)	メアリー・ヨー	国際化のプロセス マツダの事例 The Process Internationalization A case Study of Mazda Motor - Corporation
(今 中)	村 上 智 章	J.S. ミルとアイルランド問題—J. S. Mill, The condition of Ireland, 1846~1847を中心として
(山本雅)	一 色 哲	自由民権運動における政治と宗教の交錯—岡山県高梁基督教会の場合

生物圏科学			
(林)	杉山	康晴	ヒメカンアオイ節植物に含まれる揮発性成分組成の地理的変異とギフチョウ幼虫の食草選択に関する研究
(福岡)	石川	義二	中国山地に発生する局地低気圧の発生・発達特性と海風との関係について
(藤井博)	折茂	慎一	水素吸蔵のための新しい複合材料の開発
(佐田)	河本	直実	岡山県久世町北東部における三郡変成岩および弱変成岩の層序と地質構造に関する研究
(水本)	菊池	慎一	リーマン面上の偏微分方程式 $\Delta u - qu = f$ の有限要素：近似
(渡部)	白川	敏彦	強結合—成分古典プラズマ表面の理論的研究
(上里)	杉若	弘子	ストレス状況下における心理的生理的反応—個体反応特殊性—の研究
(栃木)	鈴木	滋	四国地方における地すべり調査法の基礎的研究
(舟場)	田端	和彦	産業統計解析による日本製造業の地域構造
(大林)	塚本	英明	Y系酸化物高温超伝導体の赤外異常と超伝導性
(藤井博)	手島	文雄	三元系セリウム化合物Ce-Ni-Snの物質探索と物性
(杉本)	十時	一浩	ラットの条件性情動行動と脳内電気現象との関連
(岡野)	豊田	剛司	エチオピア産ニガキ科植物の成分検索
(福岡)	鳥居	淳	団地気候と周辺環境の関係についての都市気候学的研究
(松田)	平井	宏治	素粒子の異常共鳴状態の研究
(水本)	正岡	秀史	リーマン面上の偏微分方程式の固有値問題の有限要素：近似
(田村剛)	松岡	正	X線回折法による低密度液体水銀の構造に関する研究
(開発)	南	利幸	広島湾の海陸風とチャコール・花粉飛散量との関係について
(渡部)	森	春幸	コンピュータ・シミュレーションによる液体金属の構造の研究
(堀忠)	森川	俊雄	入眠期の脳波のトポグラフィー解析
(大林)	山下	浩之	超流動ヘリウムにおける動的相関の温度変化
(根平)	和田	秀次	ブナ極相林およびその二次林の群集構造
(重中)	安藤	元紀	Mechanism of rapid axopodial contraction in Heliozoa 太陽虫における軸足収縮の機構
(天野)	大宅	芳枝	無タンパク培養下におけるニワトリ胚細胞の増殖調節機構—トランスフェリンの必要性について
(武森)	小川	紀之	副腎ミクロソームステロイド水酸化電子伝達系の反応機構—チトクロム b_5 による活性調節
(内山)	小田	司	ヒト白血病細胞の分化誘導における初期決定状態の解析
(天野)	河村	佳徳	アフリカツメガエル肝細胞の成熟分化についての研究—変態期に特異的に発現する遺伝子の検索—
(倉石)	児島	清秀	トマト幼果形成期・成長期の植物ホルモン、特にインドール酢酸・アブシジン酸の消長
(豊島)	小林	次郎	ESR法による光合成光化学系IIでの電子移動過程の解析
(古前)	納	海燕	サンヨウアオイとミヤコアオイの種生物学的比較研究
(上領)	三戸	成雄	酵母ベルオキシソーム系遺伝子群の染色体マッピング
(小林)	吉田	将之	Neural control of the buccal muscle movement in the African giant snail, <i>Achatina fulica</i> Férussac 軟体動物アフリカマイマイにおける口筋運動の神経制御
(倉石)	涌嶋	智	タイ国および日本に生育するマングローブの土壌条件

退官の言葉

F先生のお言葉

古 前 恒

(自然環境研究コース)

平成元年は学内での仕事の外に、学会のシンポジウムや会社の研究所での講演、他大学での集中講義、マレーシア・インド・ネパール・中国への出張など、広島大学における私の最後の年としては、いささかハードなスケジュールが続いたが、思い出の多い年であった。

とりわけ集中講義の合い間にお訪ねしたF先生のことである。先生は総合科学部の前身である教養部を定年で退官され、もう20年近くにもなられる。で退官後一度もおめにかかれる機会がなかったので、鹿児島大学へ出張した時を利用してお伺いした訳である。

先生の邸宅は桜島が手の届くように見渡すことのできる市の中心部に近い高台にあった。お伺いする前日、電話したところ丁度病院へお出かけになっているとのことであったので、玄関の呼鈴を押しながら、あるいは病に臥していられるのではないかと、一抹の不安を感じた。お宅は改築中の様子で、通された奥座敷には、足の踏み場もないほど書物が並べられていた。先生はその本の山の中で端然とお座りになっていた。私は思わず安堵の胸を撫で下ろした。

一時間ばかりの短い時間であったが、先生の声咳に接することは私にとって無上の喜びであった。話題は盡きることなく続き、研究の話になると先生は若者のようであった。もう既に傘寿を過ぎていらっしゃる先生は腰がややまがり、少し前かがみになって歩かれるが、杖なしで毎日植物観察に出かけ、研究を進めているとのことである。邸内に設けられている研究室兼書斎で研究一筋に打込んでいらっしゃるお姿は神々しいほどであった。先生の家を辞する時「ああ、まだ60ですか。これからですよ」と明るい笑顔で送って下さった。

広島に帰って間もなく、話題となったマタタビの白化現象について論文を送って下さった。先生は50年も前にこの現象に着目し、ラテン語で発表しておられたのであった。私は先生の学問の深さに感動した。この現象は化学的側面から化学生態学的に研究してみたいものだ。

少年老い易く学成り難しという文句は中学生の頃習ったが、最近しみじみと実感する。F先生のお言葉のように、これからは本番の人生のような気がしてならない。

最後に総合科学部の教職員ならびに学生諸君の今後の発展とご多幸を祈念してやまない。あがとうございました。

「私の昭和史」

宮 原 満 男

(生体行動科学コース)

ヒトケタ氏の多くは、やがて現役を去る日も近い。

あるヒトケタ氏の歩んだ激動の時代とは何か。昭和19年学徒総動員令によって、“花と蕾の若桜 五尺の命ひっさげて”歌に送られて、三菱広島製缶工場に軍艦のボイラーを作りに行った。7時30分から5時30分までの10時間労働。その上2交替制の夜勤まで入り、立ちながら眠るというきびしい勤めだった。空襲警報の度に全速力で防空壕へ。20年に入るとますますひんぱんになった。全国の都市が焼土化してゆく中で、広島市にも建物を強制撤去して防火帯設置が命令され、広島グループは7月30日から8月4日まで、土橋町(中国新聞社附近)に配置され、運動会用の綱を柱にしぼり、引き倒すという荒っぽい作業で、炎熱、ほこり、力作業の連続だった。6日からは三菱祇園グループがその附近にいて、殆ど全滅に近い被害にあったときく。それが今の平和大通りなのである。あの運命の6日の朝汽車が遅れ工場に入る寸前、青色い光と百雷が落ちたかと思う大爆発、ありとあらゆるものが下から上から飛んできた。ほこりが晴れた隙間から巨大なキノコ雲が見えた。修羅場と化した街中を抜け、作りかけた庚午大橋(丸太の一本橋)を渡り、猛烈な黒い雨をくぐり草津町・己斐

の町を抜けた。今度はカンカン照り、全市黒焼と火に覆われ世の末かと思わせた。線路の枕木が燃え、横川町一帯は火の海で三篠橋も渡れず、鉄橋も渡れない。仕方なく楠木町（交通公園）附近から、太田川を着のみ着のまま、川砂に足をとられながら泳いだり、歩いたりして渡った。

饒津鉄橋の上で下り線の長い貨物列車が転覆していた。そしてその近く道端に日の丸のついた0戦らしい翼が降されていた。東練兵場（光町）を抜け海田町まで歩いた。そこから壊れかけた汽車に乗って瀬野町に9時過ぎに着いた。飲ま食わずの長い長い16時間だった。8日再び工場に行った。守衛が中学生は帰きなさいと云ってくれた。原爆とは知らず水主町、中島町（平和公園）、ひん曲った相生橋の中心地を抜け紙屋町から広島駅へ。そこには多くのツメ跡が残っていた。それから1週間後日本は敗けた。15日正午大粒の涙を出して泣いた。9月に学校が再開されたが雨や雪が降りこむ窓、新聞用紙でつくった教科書。やみ市をほっつき歩いた。皇国日本から一転して民主主義日本へ。めまぐるしく変わる世相に死に物狂いで生きてゆくそんな年だった。ひしがれた街や田舎に、“赤いリンゴに口唇寄せて だまって見ている青い空”「リンゴの歌」が愛唱され国民の心の糧となった。今日本は世界に誇る経済大国になった。

しかし今日までに多くの人の血と汗と努力の結晶が今日の日本を築いたと思う。

あるヒトケタ氏もそんな激動の時代に生きてきた。

教養部から総合科学部へ幾多の試練があった。今からは君達の時代と思う。総合科学部の発展を祈りながら。

「総科・7 $\frac{1}{2}$ 」

春 田 節 子

（外国語コース）

この三月末で、ちょうど7年と半年間、広島大学総合科学部の教官をつとめさせていただいたことになりました。

ここだけの話ですが、私は放浪癖があるらしく、おとなになって以来、一か所に留っていたのは、これが最長記録なのです。それほどまでに、私にとって、広大も、広島という土地も、恵まれたところであり、思い出深い場所になりました。東京出身の私が、やっとみつけた故郷、という感じです。

7年6か月前に、採用が決ったときには、正直ビックリしました。まったくコネなし人間が、公募の話聞き及んで、なぜかアフリカから（配偶者の長期出張に伴い）、三才と六才の子供たちを連れて、単身赴任（？）したい、と応募したわけです。その「（一応）主婦」を経歴と業績からの判断で、採用しましょう、というのですから！偏見・差別とまったく無縁の「開かれた人事」。感動でした。

個人的に置かれている状況や、私自身の力が足りないために、満足のいくほどお役に立てないことが多く、誠に申し訳ない気持ちです。でも、先輩の先生方をはじめ、大学の方々には、基本的にサポートして下さる姿勢を崩さずに、しっかりと指導して下さいました。学生の皆さんも、「ゲンキの素」をたくさん分けて下さいました。

外国語コースの先生方、総科全体、また他学部の先生方も、大変御親切に御指導下さり、勉強させていただきました。学際的に惜しみなく協力し合う自由な学風、そして個性的な人格やライフスタイルを好意的に認め合いながら、大きな和を作り上げていく寛大な雰囲気。心からありがたく、素晴らしい、と思います。

このたび、「一身上の都合」で、とらば一ゆきさせていただくことになりました。行く先は、日本女子大学が新設する人間社会学部（の中の文化学科）で、人文系の総科のようなところ。自由で暖かいムードをどこまで再現できるか（そして、できたら学問的水準も）、努力して行くつもりです。

すてきな7 $\frac{1}{2}$ 年間を本当にありがとうございました。広大と総科の雄大な未来を信じて、頼りに思っております。これからも、よろしく願います。

音から音へーある広島体験

立川孝一

(地域文化コース)

1月30日、夜9時。娘がぼくの所にやって来て「おやすみなさい」と言う。机から目をあげるときには、彼女はもう寝室に向かって駆け出していた。静寂がはじめてわが家に訪れる。

『飛翔』の原稿を書くために、ぼくは7年間の広島生活をあれこれと回想しているところだった。色紙や絵本をたずさえて仕事場に闖入するあの小悪魔さえいなければ、二枚の原稿用紙などはとうに征服されていたはずなのだ。だが不平は言わぬことにしよう。たくみに広島弁をあやつる三才の娘は、ぼくの広島体験の紛れもない証^{あかし}なのだから。

思い起こしてみれば、ぼくの「研究」に刺激をあたえ続けてきたのは静寂ではなく、あらゆる種類の騒音——自然や人間の呼びかけ——だった。「人間の本性(nature)は社会騒音(sociabilite)にある」と言ったのはミシュレだったが、物音は不毛なる空間を断ち切り、赤裸々な現実へと目を開かせてくれる。研究室の窓から侵入する調子はずれのバイオリン、中核派や原理研の辻説法。帰路の眠りを妨げる市電の車内アナウンス。路上を威圧する右翼の君が代。パチンコ屋から流れ出る軍艦マーチ。そして家に帰れば、「じゃけん」の娘が待っている。

これに較べれば、「学界」とはきわめて静寂な所だ。去年はフランス革命200周年ということで東京で大きなシンポジウムがあった。昼食時に飲んだビールが原因でぼくは二人分の報告を居眠りしてしまった。ところが、目が覚めて周囲を見渡すと他の人々もやっぱり眠っている(目をあけたままで)。酔いも覚めて頭がすっきりしたので、ぼくは聴衆の眠りを破るべくおもむろに断ち上がり、挙手して発言を求めた。決面の司会者が「3分だけ」と言って、許してくれたので、ぼくは10分を費して自説を述べた。友人はぼくを評して「横紙破り」と言った。歴史は雑学なのだから、ぼくなどは雑音で十分だと思っている。

静かな広大生よ、さようなら。筑波の学生もやっぱり同じかな？

朝の風景

「ピピッ。ピピッ。ピピッ。ピピッ。ピピピピー」
眠い目をこすりながら、目覚ましを止める。AM6:00。さあ、私の1日の始まりだ。朝食もそこそこに着替えを済ませ、家を出る。御幸橋がづらい。寒風が吹き荒れている。フルスピードで橋を通過し、そのまま到着だ。私が何処へ着いたかわかるだろうか。大学？。残念、一步手前の広電本社でした。

私は現在、市内電車の“車掌”を務めている。学生がスヤスヤと寝息をたて、あるいはお家へ帰ってくる頃、私はもう電車に乗っているのだ。「えっ。市電に車掌なんかおったっけ？」無理もない、乗務しているのは朝のラッシュアワーだけなんだから。

①・②・③号線に乗っているのです。

PART 1

冬の日の出は7時すぎ。まだ薄暗い6時半すぎ、①号に便乗して広島駅へ向かう。車掌を務めるのは広島駅からだ。「お待たせしました。紙屋町経由の宇品行でございます」ドアを開けたとたん、我先に乗ってくる高校生。彼らには閉口する。その後サラリーマン・OLと続く。車内はたちまち満員に。「ドア閉めます」あー今日もお客に置いてけぼりを食らわしちまっ

PART 2

「次は本通、ます」紙屋町のは大きく左折すが両替してくれ客の手には千円
た。
本通でござい交差点を電車る。「すまんかのォ」お札が。「ったく。細かいのぐらい用意しとけよォ」でも「はい」と100円玉9枚・50円玉、10円玉1枚ずつをにこやかに手渡す。いつの間にか電車は停まっている。外を見ると、「早く開けや！」本通電停である。



すまんが両替を……

PART 3

電車を乗り換え、2回目の乗務に。「ありがとうございます。広大附属学校前でございます」小中高生が大量に降りていく。「ありがとうございます」ランドセルの重そうな小学校1年生。さわやかな笑顔で「ありがとうございます」と言って降りていく女子高生。慌しい朝の車内、ホッと心の和むひとときである。

PART 4

宇品到着。ここで終わり、とはいかない。もう、ひと乗務。広島駅までだ。客の入れ換え。宇品港に船が着く。「チェッ」案の定、発車させてくれない。船からのお客を待つのだ。来た、来た、さながら100メートル競争だ。「紙屋町経由広島駅前行、まもなく発車となります。ご乗車の方はお急ぎ願います」駆け込み乗車で数人積んで発車する。「お待たせしました。次は……」改めて車内を見回すと、「OB・OL」ばかりではないか。「お兄さん、ちょっとちょっと」OLのひとりが私を手招きしている。「はい、回数券ですか」「これ、食べんさい」と、キャラメル2個をくれた。「お兄さん、ええ車掌さんやね。がんばりんさい」2個のキャラメル。またとないボーナスだった。

PART 5

市役所前・中電前と通勤客が大量に降りていく。そのような通勤客に混じって、朝早くから街に出かける観光客も見かける。袋町から乗ってきた老夫婦「この電車はどこからやってきたのかねえ」夫婦で会話を交わしている。「あ、この電車は大阪からきた電車ですよ」ガイドへと早変わりだ。広島市の市内電車は全国各地を走っていた電車が第二の人生を送っていること、そのためボロい電車が多く、車掌もすき間風に悩まされていること、などを話したものだ。仕事上の雑談は本当は禁じられているのだが……。広島駅で降りる際「あら、あなた学生さん？社員にしては若すぎるわ。でも感じよいアナウンスでしたよ、ガイド……さん」

PART 6

広島駅で乗務は終わり。後は本社に帰るのみ。この時、よく知り合いと出くわすのだが、ある女の子いわく「えー、広電に就職したの!?!」私、2つの顔を持つ男です。

(愛しのZETT MAN)



おれは車掌に

前夜習作

山本みつね

星は落ちる。
秋八月、二十二日の夜、丞相は病床に思った。
薬湯を匙でかき回している妻に目を転じると、穏やかな気分が寄せてくる。

「澄瑩……」

「はい」

「隆中も……秋なのだろうな」

妻はそっと薬湯の器を拝げた。彼はそれを受け取ると、ゆっくりと口に含んだ。

「……お前が来てくれたので、ずっと気分が良くなった。伯約たちに感謝せねばな」

言ってしまうしてから、妙な心地を味わう。軍律に人一倍厳しい自分が、陣中へ妻子を呼んでくれた部下たちに感謝するとは……自分はやはり、何処か気弱くなっているのだろうか。

「あなたらしくもないことをおっしゃいますな」

妻は聴くもそれを感じたようで、微笑みながら言った。

「私らしくないか」

「はい」

互いは暫く、もの言わなかった。温かい沈黙だった。

やがて彼は思い出したように薬湯を飲み干すと、器を妻に返した。

「私は……融通が利かなさ過ぎたのだろうか。この頃よくそう考える」

「……」

「今少し違った生き方もあったのではないか……もっと別のやり方もあったのではないか……澄瑩、私は無能だったのかもしれない。外交では結局荊州を失い、戦場では机上の策士、いまだに中原に進むもままならぬまま、命尽きようとしている……私は、隆中であのまま畑を打って暮らしていた方が良かったのかもしれない」

妻は彼の愚痴とも思える言葉をじっと聞いていたが、彼が口を閉ざすと、その聡明な瞳を穏やかに光らせて微笑んだ。

「人それぞれ、負うに相応しい役と、そうでない

役とがございましょう。負うたところでさまにもならぬことにまで気を回すのは、その役を担う方々への侮辱。そうお考えになれば、少しは宜しいのではございませんか？」

丞相はいささか意表を衝かれ、暫時は言葉も忘れて妻を見つめた。その漆黒の瞳に、やがて、何処か悪戯っぽい、照れ臭そうな笑いが湧きあがってきた。

「侮辱……」

おかしそうに呟く。

「そうか、侮辱か……」

そういう見方もあったのだ。彼は託孤の遺詔以来、この国の軍事政治を一身に担い、あらゆる所に心を砕き続けてきた。だがそれは反面、人任せに出来ない性格とも言えたから、あるいは本来ならそれぞれの職務を任され切っても良いだけの人達に対して失礼だったかもしれぬ。彼は苦笑めいた息をつくど、改めて妻に笑いかけた。

「……お前が私の許へ来て、もう三十年以上になるな……」

ふと彼の目は遠くなる。

「そういえば、覚えているか、澄瑩、あの時の戯れ唄を？ あれはひどかった」

「阿承の醜女を背負い込んだ？」

妻はくすりと笑った。

「ああ。私の嫁選びを真似するな、というのはともかくとしてだな、あれは……」

「本当のことですもの」

また彼女は笑い、つられて彼も笑った。

「だが、この齢でもう美醜もあるまい。心ばえの美醜が面に出るだけだ。いや……本当は最初からそうなのだが、多くの者はそれを、たとえ頭では知っていても、なかなか実感出来ないのだろうか……」

涼とした声は静かであった。

「私が生涯の内では誰はばからず誇れる数少ないことのひとつは、澄瑩、お前を妻に選んだことだ」

丞相の妻は何も言わなかった。彼女はただ、ゆっくりとひとつ、まばたきだけだった。

「おかしいか？ 私がこんなことを言うのは？」

旅について思うこと

湊 啓 一 (社会科学コース三年)

今海外旅行が大ブームである。各地の観光名所を見て回り、豪勢な旅にしようという人から泣く泣く貯めた金で貧乏旅行をする人まで様々である。僕は一年生の夏休みに『10万円で行ける海外旅行』という本を読み一大決心をして、その年の秋から三年生の6月まで焼き鳥屋でバイトしてコツコツ貯めた20万円を手に、昨年の夏休み7月15日から8月7日までアメリカ大陸を一周する旅に出た。実は友人の石井君に中国旅行に誘われており、船の切符も手配していたのだが、天安門事件があって急ぎょ自分一人だけ予定を変更した。石井君は僕を恨んでいることだろう。(でも彼は楽しい旅をしてきたようだった)。悪い事をしたと思う。

ところで、僕は一人旅が好きである。修学旅行のように友達とワイワイ行く旅も楽しいが、旅は日常から離れるためにするものだと思っているし、男子たるもの孤独を愛する境地がなければならない、と書いた本に感化されたせいかも知れないけれど、一人旅のおもしろさを知ってしまえば格別だ。僕の一人旅好きは小学二年の時国鉄(懐かしい)で三駅離れた所にあった耳鼻科に通ったことから始まったと思っている。自動販売機なんかなかったので、出札のおじさんに「三原までこども一枚」なんて言って自分で初めて切符を買った時は感激した。六年生の時はブルトレインが好き、寝台車に乗って東京まで行ったりした。

今回の旅も全てを自分の手でやる旅にしたかった。初めての海外旅行でわからないことばかりで、帰って友人に話すと「お前何が楽しかったんね」といわれるような旅ではあったけれども。

僕は無計画、無頓着な性格らしいので、どこを回るとか、一日いくら使うとかは決めなかった。ただ漠然と「アメリカを一周する」ということだけは決めていた。高校一年の時聴いたサイモン&ガーファングルの曲「アメリカ」の中に、「ピッツバーグからグレイハウンド(アメリカのバス会社の名前)に乗り」「アメリカを探しに旅に出た」というフレーズがあるのだが、これに憧れ、とにかくグレイハウンドに乗りたい、という衝動にかられていた。アメリカには自由の女神とか素晴らしい観光地が数知れ

ずあるが、僕にとってはグレイハウンドに乗ることが夢だった。今考えるととても単純でバカバカしい動機だったかも知れないが。

ロスサンゼルス発着の便が12万8千円(一日早ければ9万9千円だったが予約が遅く取れなかった)と一番安かったのでそこから入ることにした。ロス～ラスベガス～グランドキャニオン～セントルイス～ワシントン～フィラデルフィア～ニューヨーク～ナイアガラ～トロント～シカゴ～デンバー～ソルトレイクシティ～サンフランシスコ～ロスというルートをとったが、グレイハウンドがいくら好きでも72時間も乗ればいやになる。ラジオを聴くにも電波が届かず、隣席の人と話そうとしても言葉が通じず、退屈な時は日本に帰りたく思ったりもした。旅の途中でトラベラーズチェックを全部使い果たしたり(カードがあったから良かったが)、無計画なものほどにしとくもんだと思った。その時つけていた日記を読み返しても行き当たりばったりの旅だったような気がする。

ろくに土産も買ってないし、観光案内は詳しい本が出ているのでここでは書かない。が、僕にとっては会う人、見る物全てが感動的だった。神戸出身で一人旅をしている女の子とグランドキャニオンで友達になった。オーストラリアにワーキングホリデーで一年間住んだことがあって、永住権を取得して日本食のレストランを経営するのが夢という話を聞いた。昼間にグランドキャニオンの雄大さに触れたせいもあるだろうが、自分がちっぽけに思えた。カナダのトロントに寄った時は、553mという高さ世界一のCNタワーに登ったが、そこから見る景色は感動以外の何ものでもない。自分の小ささばかりを思い知らされた。

旅はやっぱり素晴らしいものだと思う。僕は根っから感激しやすく、単純バカなので言うのかも知れないが、自分の一生のテーマにしようと思う。森田健作のドラマのようになってしまったが、誰でも一度は一人きりで遠くへ出かけてみるといいんじゃないだろうか。

広報委員

安部	剛	中根	周步	間瀬	茂
楠瀬	正明	林	春男	水島	裕雅
田中	暁	深宮	齊彦	森	利一

事務官

宮原	和男	中道	一博
----	----	----	----

学生編集員

伊藤	多喜子	小松	千尋	野村	幸代
稲垣	豊	斎藤	隆志	浜田	朋美
内山	清美	定行	美佳	布川	克彦
岡村	美穂	下野	寿子	福永	弘樹
海佳	隆雄	杉原	由香	宮尾	佳道
川本	瑞恵	高橋	真澄	森	香理
岸本	詩子	戸敷	聰	矢野	泉
桑原	秀行	中家	伸之	山崎	明子

広島大学総合科学部広報委員会

住所：広島市中区東千田町1-1-89

電話 (082) 241-1221

1 月 JAN 月 ㉑		2 月 FEB 月 ㉒		3 月 MAR 月 ㉓	
コースガイダンス		後期末試験			
① 火	元日	1 金		1 金	
2 水		2 土		2 土	
3 木		③ 日		③ 日	
4 金		4 月		4 月	
5 土		5 火		5 火	
⑥ 日		6 水		6 水	
7 月		7 木	志望コース届提出期間	7 木	
8 火		8 金		8 金	
9 水		9 土		9 土	
10 木		⑩ 日		⑩ 日	
11 金		⑪ 月	建国記念日の日	11 月	
12 土		12 火		12 火	
⑬ 日		13 水		13 水	
14 月		14 木		14 木	
⑮ 火	成人の日	15 金		15 金	
16 水		16 土		16 土	
17 木		⑰ 日		⑰ 日	
18 金		18 月		18 月	
19 土		19 火	志望コース第一志望者数の公表	19 火	
⑳ 日		20 水		20 水	
21 月	特別研究論文提出期限 (地域文化コース)	21 木		⑳ 木	春分の日
22 火		22 金	学年末休業	22 金	
㉑ 水		23 土		23 土	
24 木		㉒ 日		㉒ 日	
25 金		25 月		25 月	
26 土		26 火		26 火	卒業式(予)
㉓ 日		27 水		27 水	
28 月		28 木	志望コース変更願提出期限	28 木	
29 火				29 金	
30 水				30 土	
31 木	特別研究論文提出期限			㉓ 日	

- [社会科学コース]
- [外国語コース]
- [数理情報科学コース]
- [物質生命科学コース]
- [自然環境研究コース]
- [生体行動科学コース]
- [社会文化・情報行動科学・環境科学コース]

4 月 APR 月 ㉔		5 月 MAY 月 ㉓		6 月 JUN 月 ㉒	
奨学金手続期間 授業料免除手続期間 新歓コンパ オリエンテーションキャンプ 春季休業		教育実習 春のソフトボール大会 聴講確認 (中旬)		家庭教師ガイダンス 6月祭	
① 日		1 火		1 金	
2 月		2 水		2 土	
3 火		③ 木	憲法記念日	③ 日	
4 水		④ 金	国民の休日	4 月	
5 木		⑤ 土	こどもの日	5 火	
6 金		⑥ 日		6 水	
7 土		7 月		7 木	
⑧ 日		8 火		8 金	
9 月	入学式	9 水		9 土	
10 火	元年度後期成績発表 コース決定の発表	10 木		⑩ 日	
11 水		11 金		11 月	
12 木		12 土		12 火	
13 金	前期授業開始	⑬ 日		13 水	
14 土		14 月		14 木	
⑮ 日		15 火		15 金	
16 月		16 水		16 土	
17 火		17 木		⑰ 日	
18 水		18 金		18 月	
19 木		19 土		19 火	
20 金		⑲ 日		20 水	
21 土		21 月		21 木	
⑳ 日		22 火		22 金	
23 月		23 水		23 土	
24 火		24 木		㉔ 日	
25 水		25 金		25 月	
26 木	コース決定者履修届提出期限	26 土		26 火	
27 金		㉗ 日		27 水	
28 土		28 月		28 木	
㉘ 日	みどりの日	29 火		29 金	
㉙ 月	振替休日	30 水		30 土	
		31 木			

7月 JUL 月 12		8月 AUG 月 11		9月 SEP 月 01	
				1年生 沼田研修 大卒論文提出 前期末試験 (上旬~下旬)	
① 日	1 水	1 土	2 日	2 日	2 日
2 月	2 木	2 日	3 月	3 月	3 月
3 火	3 金	3 月	4 火	4 火	4 火
4 水	4 土	4 日	5 水	5 水	5 水
5 木	⑤ 日	5 月	6 木	6 木	6 木
6 金	6 月	6 日	7 金	7 金	7 金
7 土	7 火	7 月	8 土	8 土	8 土
⑧ 日	8 水	8 日	⑨ 日	9 日	9 日
9 月	9 木	9 月	10 月	10 月	10 月
10 火	10 金	10 日	11 火	11 火	11 火
11 水	↑ 夏期休業	11 土	12 水	12 水	↑ 志望コース予備調査期間
12 木	12 日	12 月	13 木	13 木	13 木
13 金	13 月	13 日	14 金	14 金	14 金
14 土	14 火	14 月	15 土	15 土	敬老の日
⑮ 日	15 水	15 日	⑮ 日	16 日	16 日
16 月	16 木	16 月	17 月	17 月	17 月
17 火	17 金	17 日	18 火	18 火	18 火
18 水	18 土	18 月	19 水	19 水	19 水
19 木	⑲ 日	19 日	20 木	20 木	20 木
20 金	20 月	20 月	21 金	21 金	21 金
21 土	21 火	21 日	⑳ 日	22 日	22 日
㉑ 日	22 水	22 月	23 月	23 月	23 月
23 月	23 木	23 日	㉑ 日	24 日	24 日
24 火	24 金	24 月	㉒ 月	25 月	25 月
25 水	25 土	25 日	25 火	25 火	25 火
26 木	㉓ 日	26 月	26 水	26 水	26 水
27 金	27 月	27 日	27 木	27 木	↑ 秋季休業
28 土	28 火	28 月	28 金	28 金	28 金
㉑ 日	29 水	29 日	29 土	29 土	29 土
30 月	30 木	30 月	㉑ 日	30 日	30 日
31 火	31 金	31 日			31 日

10月 OCT 2 月 9		11月 NOV 月 8		12月 DEC 月 7	
前期成績発表 （10月1日） 祝日 祝日		大学祭 秋のソフトボール大会			
1 月	秋季休業	1 木		1 土	
2 火		2 金		② 日	
3 水		③ 土	文化の日	3 月	
4 木		④ 日		4 火	
5 金		5 月	広大創立記念日	5 水	
6 土		6 火		6 木	
⑦ 日		7 水		7 金	
8 月		8 木		8 土	
9 火		9 金		⑨ 日	
⑩ 水	前期成績発表 体育の日	10 土		10 月	
11 木	後期授業開始 志望コース予備調査集計結果公表	⑪ 日		11 火	
12 金	単位習得確認期間	12 月		12 水	
13 土		13 火		13 木	
⑭ 日		14 水		14 金	
15 月		15 木		15 土	
16 火	後期聴講受付期間	16 金		⑯ 日	
17 水		17 土		17 月	
18 木		⑰ 日		18 火	
19 金		19 月		19 水	
20 土		20 火		20 木	
⑳ 日		21 水		21 金	
22 月		22 木		22 土	
23 火		⑳ 金	勤労感謝の日	㉓ 日	天皇誕生日
24 水		24 土		24 月	冬季休業 振替休日
25 木	聴講届提出期限	㉔ 日		25 火	
26 金		26 月		26 水	
27 土		27 火		27 木	
㉘ 日		28 水		28 金	
29 月		29 木		29 土	
30 火		30 金		㉙ 日	
31 水				31 月	